

# 英米ジャーナル *The Eibei Journal*



(2017年度 GSM フィールドワーク  
海外ボランティア カンボジアスタディツアー)

明海大学 外国語学部 英米語学科

2017年度 学科活動報告

## 目 次

英米語学科教員から学生諸君に贈る言葉.....	1
4つの「ゼミ」について ～英米語学科主任挨拶に代えて～.....	1
ことばの力.....	3
英米語学科ゼミ（専門領域研究講座・卒業研究）紹介.....	5
大津由紀雄ゼミ.....	5
河原伸一ゼミ.....	8
金子義隆ゼミ.....	11
川成美香ゼミ.....	13
ジェシー・グラスゼミ.....	17
小林裕子ゼミ.....	19
嶋田珠巳ゼミ.....	23
高田智子ゼミ.....	27
高野敬三ゼミ.....	29
瀧田健介ゼミ.....	31
津留崎毅ゼミ.....	33
内藤貴子ゼミ.....	35
藤田智子ゼミ[後期・内藤貴子ゼミ].....	37
ケイコ・ナカムラゼミ.....	39
原和也ゼミ.....	43
松井順子ゼミ.....	46
海外英語研修.....	48
CQU（オーストラリア）.....	48
UCLA（アメリカ）.....	61
カンタベリー・クライスト・チャーチ大学（イギリス）.....	74
GSM フィールドワーク参加報告.....	83
英米語学科卒業論文発表会報告.....	89
複言語・複文化教育センターの活動報告.....	91
第10回明海大学英语スピーチコンテスト報告.....	99
英米語学科同窓会 明英の活動報告.....	102
卒業生からの手紙.....	103
編集後記.....	105



---

# 英米語学科教員から学生諸君に贈る言葉

---

## 4つの「ゼミ」について

～英米語学科主任挨拶に代えて～

英米語学科主任 津留崎 毅

「ゼミ」とは、ドイツ語の「ゼミナール」(Seminar)の略語で、少人数の学生が、教授などの指導のもとに特定のテーマについて研究し、その成果を報告・討論するタイプの授業のことです。もっとも大学らしい授業形態の一つであるとも言えるかも知れません。英語で「セミナー」と呼ばれるものと基本的に同じです。



英米語学科では、長い間（おそらく 20 年近く?）、「ゼミ」といえば、3年次必修科目の「英米語学科ゼミ」を指していました。2016年度の卒業生も、「ゼミ」と聞けば、自分が3年次に履修した「英米語学科ゼミ」を思い浮かべたに違いありません。

さて、このような状況も、2017年度からは、大きく変わることになります。「ゼミ」と呼んでも違和感のない必修科目が、1年次から4年次までの全学年に配置され開講されたからです。現行のカリキュラムで、ゼミと呼んでも違和感のない科目は、以下の4つです：

- ・1年次： フレッシュパーソンセミナー I、II
- ・2年次： 課題探求セミナー I、II
- ・3年次： 専門領域研究講座
- ・4年次： 卒業研究

3年次の「専門領域研究講座」は「英米語学科ゼミ」の後継科目で、この科目（だけ）を「ゼミ」と呼んでしまう教員は少なくないと思います（何を隠そう私もその

一人です)が、実際には、他の3科目も「ゼミ」と呼ぶに相応しい科目目標と内容を持つ科目です。

1年次の「フレッシュパーソンセミナー」で、最高学府である大学で学び、研究していくために必要となる基本的スキルや心構えを身につけ、2年次の「課題探求セミナー」で自分が追求していくに相応しい課題を見つけ、3年次の「専門領域研究講座」で、自分が見つけた課題に取り組むために必要となる専門知識を身につけ、4年次の「卒業研究」で、自分の課題に関するリサーチ等を行い、卒業論文や卒業レポートの形でまとめる、ということが期待されています。<sup>1</sup>

4年次必修科目である「卒業研究」を履修して卒業するのは、2014年度入学生(=2017年度の卒業生)が第一期生になります。「卒業論文」という名前の科目は以前からありましたが、あくまでも選択科目であり、論文やそれに類する「作品」を残すことは義務ではありませんでした。2018年3月の卒業生は、第一期生として、何らかの「作品」を提出することを義務付けられ、それに成功した「優れた学生たち」であることになります。

卒業論文もしくはそれに類する「作品」を残すことは、決して簡単なことではありません(読書感想文のようなものでは「論文」として認めてもらえません)が、そのような「ハードル」があっても、充実した4年間を過ごすことが可能になると言えるかも知れません。現在の1~3年生の皆さんは、卒業するためには「卒業研究」の単位が必要であること、この科目の単位を修得するためには、何らかの「作品」の提出が必要であることを常に念頭において、毎日を過ごして下さい。「作品」を提出するための取り組みは、1年次のゼミである「フレッシュパーソンセミナー」から始まっているのです。

---

<sup>1</sup> 「卒業研究」の単位を取得する方法は、「卒業論文／卒業レポートの提出」に限られるわけではありません。科目担当者の方針により、卒業「制作」(e.g., 英語の原書の翻訳、日本語の文学作品の英訳)や卒業「パフォーマンス」(e.g., 英語による演劇や英語人形劇の上演)等を行うことによってこの科目の要件を満たすこともできます。履修登録をする際に、科目担当者の方針をよく確認して下さい。いずれにせよ、「卒業論文／卒業レポートの執筆」が最も一般的であることは、間違いありません。実際、2017年度の私の「卒業研究」の履修者は、全員、卒業レポートの執筆に取り組みました。

## ことばの力

外国語学部学部長 大津 由紀雄

この文章を書いているのは2018年2月17日のお昼ちょっと前です。

前日の16日には前年11月の練習時に転倒し右足関節外側靭帯を損傷するという大けがを負った男子フィギュアスケートの羽生結弦選手がその復帰戦にあたる平昌オリンピックでのショートプログラム（SP）で劇的な復活を遂げ、きょう行われるフリーの演技次第でオリンピック2大会連続の金メダル獲得が大いに期待されるという雰囲気の中でこの文章を書いています。



朝日新聞のネット版に「孤高の星 羽生結弦」と題されたフォトストーリー（取材 後藤太輔記者、[https://www.asahi.com/olympics/2018/special/hanyu-star/?iref=kijishita\\_bnr](https://www.asahi.com/olympics/2018/special/hanyu-star/?iref=kijishita_bnr)）と「羽生結弦、高い修正力の源は「言葉力」」（後藤太輔記者、2018年2月17日付）と題された、とても興味深い記事が載りました。ちょっと長いのですが引用します。

まだ4回転サルコーを完全に自分のものにできていなかった2013年、羽生はコーチのオーサーを質問攻めにした。「助走のカーブは？」「跳び上がる方向は？」「氷についていない方の足の使い方は？」「腕をどう使うのか？」受けた助言、自分のひらめきを言葉にしてノートに書き留め、試しては修正する。「最大公約数と言っているんですけど、絶対見つけなきゃいけないポイント」を確立していく。言葉を動きにし、動きを言葉にする。（「孤高の星 羽生結弦」）

羽生の言葉を借りれば、「最大公約数」を「連想ゲーム」のように、小学2年のころからつけ始めた「研究ノート」に記録する。つまり、成功や失敗した時に体の各部分がどう動いていたかを整理し、共通点を書き出すのだ。そして、ジャンプ成功のための「絶対に見つけなきゃいけないポイント」を絞っていく。だから、羽生は自分の精神状態や体の動きを、言葉で的確に言い表せる。特にミスした時ほど話す。「話すことで課題が明確に出る」と言い、「（自分の言葉が書かれた）記事を読み返すと、

自分の考えを思い返せる。それは財産であり、研究材料。だから、しゃべる」。この日のSPは、そうやって身につけた完璧な4回転サルコーから始まった。休んで鈍った感覚を「記事だとかで勉強して」取り戻すのに、時間はかからなかった。【改行削除】(「羽生結弦、高い修正力の源は「言葉力」)

少しわかりにくいかもしれませんが、つまるところ、こんなことになるのだと思います。羽生選手は「自分の精神状態」という一過的で、かつ、見えないものをことばで表現することができる。彼はまた、「体の動き」という一過的なものもことばで表現することができる。ことばで表現することによって、記録し、必要な時にその情報を取り出すことができる。だから、「休んで鈍った感覚を「記事だとかで勉強して」取り戻すのに、時間はかからなかった」というのです。

ことばが持つ、この働きはとても重要です。ことばで記録することで、いつでもその情報を取り出すことができるようになるのですから。ちなみに、この働きは個人にだけあてはまるのではなく、共同体にもあてはまります。文化の記録、そして、それによる文化の蓄積がそれにあたります。

羽生選手が「自分の精神状態」と言ったときに、どんなことを指しているのか、はっきりとはわかりませんが、自分の思考、つまり、自分が考えていることについてもあてはまります。わたくしは学生の皆さんに繰り返し言うのですが、「自分が考えていることを文章化する習慣をつけましょう」、そうすると、自分の考えの鮮明でない部分、一貫していない部分が浮き彫りになります。考えの鮮明でない部分、考えつくされてない部分は文章にしようとしてもうまくいきません。一貫していない部分も同じです。

よく「自分のあたまで考えなさい」と言いますが、そう言われてもどうしてよいかよくわからない。なにせ、見えない世界でのことですからね。「1000メートル泳げるようになる」というのとはわけが違います。でも、考えていること、あるいは、考えていることを文章化することで、自分の考えをチェックすることができるのです。

そうは言うものの、慣れていない人が羽生選手のまねをしようとしてもすぐにはうまくいかないのが普通です。記事にあるように、なんととっても羽生選手は小学2年生の頃からずっとこうしたことを習慣にしていたのですからね。ただ、この習慣をつけるのはおとなになってからでもできます。最初はどううまくいなくても我慢して、続けてみる。これまでの経験から判断すると、3か月続いた人は習慣化に成功する可能性が非常に高い。ぜひみなさんもがんばってください。

と、こんな文章を書き綴っている間に、羽生選手はフリーでもすばらしい演技を披露し、オリンピック2大会連続金メダル獲得という偉業を達成しました。

---

# 英米語学科ゼミ（専門領域研究講座・卒業研究）紹介

---

## 大津由紀雄ゼミ

### 専門領域研究講座

3年 横山 里菜

こんにちは、少しばかり大津ゼミの紹介をさせていただきます。大津ゼミには現在「12名のゼミ生、院生、訪問研究員、秘書」が在籍しています。実際に、ゼミに入ってみなければわからない部分もあると思いますが、この2ページのゼミ紹介文で、皆さんにゼミの深い部分について感じ取っていただければと思います。

### ゼミの活動内容

私たち大津ゼミでは、中学生のための英語学習参考書の作成を専門領域研究講座(ゼミ)のテーマとしています。

参考書を作るためには、中学校での学習内容の確認とその理解が前提となります。その上で、学習内容をどのようにわかりやすく、学習効果が上がるように、かつ、中学生が手に取りたいと思うような参考書作りが大切となります。

私たちは、この参考書作りを通して、自分たちも英語の基礎を改めて学習し直した事で、さらに英語の能力を向上させることができました！

そして卒業研究はさらにその中から自分の研究テーマを決め、そのテーマを掘り下げ研究していきます。





## ゼミ以外の活動

毎週のゼミの時間以外にも、ゼミ呑み会、ゼミ合宿などのとても楽しい時間があります！  
去年の夏には、勝浦のセミナーハウスで合宿があり、その中でバーベキューや花火をしたり、海に行ったりと、勉強以外の交流がたくさんあり「先生、ゼミ生、院生、訪問研究員、秘書」年齢関係なく距離が縮まった合宿となりました！さらに、ゼミ合宿の中で2つのお題に対して、ゼミ生全員で、自分たちの思った事をプレゼンテーションするというものがあり、楽しいだけでなく、とても自分のためになる合宿でした！

大津先生は、ゼミ生の元気がなかったりすると、とても心配をしてくださり、親身に色々な相談に乗ってくださるとても優しい方です。

大津ゼミに入った私たちは、とても楽しく、とても成長のできる1年間を過ごすことができました。



## 卒業研究

### 4年 小野 つかさ

大津先生はいつもニコニコしていてとても和やかな雰囲気の方です。今年の卒業研究の授業では、卒業レポート・論文をみんなで仕上げる！という目標で授業が始まりました。

最初はみんな簡単にテーマが決まらず、自分たちが興味のある物を挙げて授業内で発表を行い先生からアドバイスを頂きました。そして改善できる場所があったら改善して、自分たちが納得いくようなテーマを決める事ができました。自分では良いものができたと思っても、実際には、先生から指摘を沢山されてより良い文が生まれたこともあります。生徒達も意見を述べてアドバイスをもらったことで、たくさんの視点から物事を見直す事ができたと思います。この発言をするということが大津先生は大切にされており、生徒が積極的に授業に参加できる体制を整えてくれました。このことは後の就職活動の面接にとっても役立ったと思います。

さらには放課後に飲み会も行いました。この飲み会では、普段先生に聞けないことや、学校生活の悩み、そして就職活動の悩みも相談しました。先生はいつも的確なアドバイスをくださり、就職活動の不安を取り除いてくれました。私は、就職関連の授業を取っていませんでしたので、エントリーシートの文を大津先生と一緒に考えていただきました。大津先生は、言語学のプロなのでとても説得力のあるエントリーシートが完成しました。そして絶対に行きたいと思っていた業界へ進路を決めることができ、夢が叶いました。

そして最後の授業には半年以上かかって一生懸命書いた卒業レポート・論文も全員提出することができ、目標を達成する事ができました。

和やかな雰囲気でもやる時はやりたい！という方は是非大津先生の卒業研究をお勧めします。



# 河原伸一ゼミ

## 専門領域研究講座

学生の生の声を紹介します。

「河原ゼミを一言で言い表すとすれば、それは“有意義”となるでしょう。私は河原伸一先生が持たれる多くの実績と、「後悔はさせません」という言葉に惹かれこのゼミに入りました。事実、先生が先輩方や企業の社長など私たちではなかなかお会いできないような社会人の方々との意見交換の場を設けてくださり、皆次々質問し役立てようと励んでいます。このようなゼミはなかなか無いと思います。」（長田）

「私は河原ゼミに入らせてもらいとても感謝しています。なぜなら河原ゼミは必ず周りのゼミがやらない事をするからです。普段体験できない事をゼミでやるので毎回ゼミに行くのがとても楽しみです。」（小林）

「社会人の方と直接お話をすることで、「社会」を肌で感じることができました。また、内定をもらっているゼミの先輩からもお話を聞き、質疑応答をすることで、就職活動に向けてのアドバイスなどを聞くことができます。新聞の記事についてゼミ生でディスカッションする就職活動対策もあります。当ゼミは就職活動に向けての意識を高めることができるゼミだと感じています。」（新鞍）

「私が河原ゼミに参加して良かった事は、毎日の行動に対して考えるという癖を身につける事ができたことです。河原先生は毎週ゼミのはじめに、今週あった出来事を聞いてくるので、何か話すネタを用意しなければいけません。したがって、自分の行動に対して考えるようになり、思考力が身についたと実感しています。」（高尾）

「河原ゼミでは、国際政治経済学をテーマとし、様々なタイムリーな話題を取り扱ってきた。グループディスカッションを通して多角的な視野で話題について考察し、クリエイティブな発想の展開やグループワークでの協調性を培ってきた。またある時は、ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロの「Never let me go」の映画や作者の文学への考えが述べられているテレビ番組を鑑賞し、ゼミ生と意見交換をすることによって文学の奥深さを学んだ。」（西沢）



## 卒業研究

13名が卒論・レポートを提出しました。執筆指導にあたり、着想のオリジナリティと自分の言葉で表現することを重視しました。また、卒業後のお仕事に活かせる研究という視点も重視しました。指導教員の添削を何度も受け、その度に真っ赤になって返された原稿と格闘していた学生の姿が走馬灯のように浮かびます。

### 提出された卒論・レポートの題目一覧

- 1 澤見有咲「百人一首と和菓子のつながり」
- 2 佐藤陽大「音楽に対するダンサーの理解がパフォーマンスに与える影響」
- 3 横須賀なつみ「花屋のブルー・オーシャン戦略に関する研究」
- 4 長澤一起「スニーカーが社会に与える影響に関する研究」
- 5 多喜川歩美「カンボジアの発展過程」
- 6 杉井亜佳莉「日中企業の経営の比較」

- 7 児玉莉緒「100円ショップ業界におけるセリアの差別化戦略」
- 8 菊口紗也佳「ドイツ第8代首相アンゲラ・メルケルは、なぜ支持されるのか」
- 9 石田 侑「日本企業のインド進出に関する研究」
- 10 牧つぐみ「キリバス共和国を日本人に売り込むには」
- 11 保坂晴香「埋もれたファッション用語」
- 12 松浦未来「日本と西洋における動物観と表現方法の比較」
- 13 勝又恵里「英文契約書に関する研究」

澤見は、恋の和歌に焦点を当てた大変ロマンチックな論文です。佐藤は、第一線で活躍している社交ダンサーです。日本人ダンサーの弱点を研究しました。横須賀は、就職先の花屋にブルー・オーシャン戦略を適用した構成の美しい論文です。長澤も就職先の商品を素材にしています。多喜川は、ボランティア活動を行ったカンボジアの教育について研究しています。杉井は、中国への長期留学経験も反映した論文です。児玉も就職先の商品を素材にしています。菊口は、ドイツ研究から日本のあるべき姿を示唆しています。石田もボランティア活動を行ったインドでの経験が執筆動機となっています。牧は、知名度の低いキリバスに対する愛が看取できます。保坂は、「プラダを着た悪魔」の原作・翻訳書・映画を繰り返し読み・観ました。松浦によれば、明海大学は「ベルーガ」です。勝俣も就職先のお仕事に直結する英文契約書について理解を深めました。



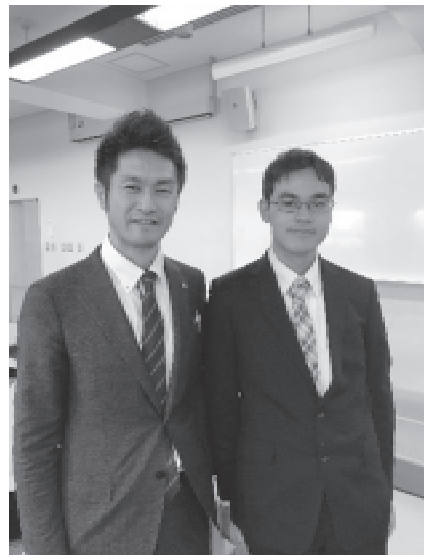
## 金子義隆ゼミ

### 専門領域研究講座

金子先生のゼミでは、英語教師を目指す上で必要となる力を付けられました。前期では、英検教材のリテリングや英作文の問題を解く練習を多くしました。それらの練習は、文章に含まれる重要な単語やセンテンスを見つける力や英作文の書き方の基礎の力をつけることができました。後期では、映像から授業ではどんな活動を行なっているのかを学び、その後模擬授業を行いました。実際の授業を映像で見てから行ったので、自分が模擬授業を行う際にどのような授業構成をすればよいのかイメージを持って取り組みやすかったです。また何度も模擬授業を計画することで、授業の構成やルーブリックの作り方などを身に付けることができました。ゼミでの時間は、教職課程生として今後の授業に活かされてくる力を育てることができて、とても有意義な時間となりました。(鈴木海優)



金子ゼミでは、1年間かけて自らの英語力をあげ、教員としての指導力を上げる活動を行なって来ました。前期では主に英検の勉強や、教科書内容のディクトグロスとサマリーを作ることで自らの英語力を上げる活動を行なって来ました。また、英語の授業のDVDを見ての授業研究も行って来ました。後期には、ディベートや、ディスカッションなどの模擬授業を行うことで、指導力を上げる活動を行いました。また、3年次から始まる英語科教育法で習ったことの確認をしてくださるのでしっかりと記憶定着ができます。週末にしたことや長期休暇前には自分のしたこと、予定などを英語で説明をする活動もするため英語力や指導力の向上が臨めるだけでなく、金子先生との距離も近いことが特徴です。授業を楽しく受けたい、教員になってから楽しい授業を行いたいと考えている方は是非金子ゼミに来てください！もちろん、教職を履修している方以外の方も歓迎です。(小川隼斗)



英検の面接練習と模擬授業が力になりました。英検の面接試験では絵を見てその状況についての説明を

考えて相手に伝える事を練習したおかげで英検の試験ではもちろん、それ以外の日常生活での英語を使う会話で誰かと話をするときもとても役立ちました。この練習をしたおかげでふとした時も英語になおして考える習慣も身についたと思えます。それともう1つ、教職関係においても少人数でしたが簡易の模擬授業をした事によって、授業の種類や評価方法の種類は多くあるものだと学びました。(小野勝春)

## 卒業研究

教職課程履修生がほとんどを占めるため、5月、6月は教育実習で全員がそろうことが難しいという背景もあり、前期と後期では目標が異なりました。前期の目標は、社会問題や時事問題、教育問題などについて、自分の意見を論理的に伝えることができるようになることでした。英検準1級の筆記試験のエッセイ形式の問題や二次試験の面接形式の問題に取り組みました。ただ、自分の意見を述べるだけでなく、友達の意見に耳を傾け、それに対して同意したり、反対意見を言ったりして、議論を深められるように取り組みました。その結果、一人は英検準1級に合格し、他二人は教員採用試験の1次試験を合格しました。

後期は、第二言語習得研究や認知心理学における動機づけ理論を学び、それを実際の指導にどうやって生かしていくかを学びました。さらに、これからの学校英語教育において、「何ができるか」という観点で評価されることになることを鑑みて、パフォーマンス評価も学びました。同時に、それに必要なルーブリックの作成にも取り組みました。

卒業研究の集大成として、学んだ動機づけ理論を実際の指導に援用するための工夫と、パフォーマンス評価とルーブリック作成を含んだ単元指導計画の作成とそれに基づく模擬授業の発表を行いました。6名の学生をペアにして、TT形式で模擬授業を行いました。どのペアも動機づけ理論を少しではありましたが、授業に取り入れることができました。パフォーマンス評価やルーブリックもまだまだ実際の授業で活用するにはまだまだな点もあるが、基本を押さえたものを作成できるようになりました。



[後列]香取小太郎、小関聖翔、大野浩輝、井上拓弥 [前列]善志瑞歩、金子義隆、野田美優

# 川成美香ゼミ

## 「専門領域研究講座」の紹介

3年 福田 綾香

私たちの川成ゼミ（「専門領域研究講座」）は、「社会言語学」について学んでいます。主に敬語表現や性差による言葉の違いや方言など、ことばのバリエーションについて英語や日本語を対象に研究しています。社会言語学は、言語だけではなく社会的・文化的背景も絡めて、日常の言語生活に関連づけて考えることのできる身近な学問でもあります。

川成ゼミでは、4月当初のゼミで明海大学のレストラン・ニューマリーンズでパフェをいただきながら、フランクに自己紹介をする事から始まります。メンバーは12人と少人数のため、仲良く居心地の良い雰囲気です。川成ゼミは、川成先生の英語学特講Ⅲの授業とも連携して行っていくので、社会言語学をさらに詳しく学ぶことができるのが特徴です。ゼミの進め方としては、英語の論文や日本語の教科書を用いて、パート毎に担当者を決めてプレゼンテーションを行います。発表する際には、各自レジュメを作成します。レジュメの作成をするにあたっては、要点をサマリーしたり、図や表を使ったりすることで、どうすれば聞き手にわかりやすくなるのか工夫を重ねるので、プレゼンテーションのスキルも磨くことができます。1年間の最大の目標はゼミ論文の作成です。ゼミ論では、自分の興味あるテーマを取り上げ、先行研究をおさえた後は、独自のデータを収集・分析して考察していきます。このゼミ論の作成は、4年生での卒業論文作成の準備にも繋がります。ゼミ論でオリジナリティーあるリサーチペーパーを仕上げることは、4年生での卒論作成のいわば「お稽古」と位置づけることができるのです。

仕上がったゼミ論は、2月初旬に2泊3日で行う勝浦セミナーハウスでの合宿における「ゼミ論発表会」で発表します。1人15分の持ち時間で、作成してきたレジュメを基に発表していきます。合宿では、4年生の先輩方の「卒論発表会」と一緒に行うので、先生と先輩方の双方から深いアドバイスを頂くことができます。さらに、先生からひとりひとりにアドバイスを頂ける個人指導の時間を設けて下さるので、こうして合宿後には更にレベルアップしたゼミ論最終版が完成します。自分たちのゼミ論発表の後には、4年生の卒論発表があり、研究の深さに圧倒されました。卒論作成に向けての準備、心構えを自覚することもできました。長い発表の合間や発表後には、ティータイムで雑談をしたり、焼肉パーティーをしたり、夜にはカラオケなどをして盛りあがりました。合宿ならではの楽しみです。セミナーハウスの目の前には美しく広大な海が広がり、夜には普段見ることのできない綺麗な星空など、美しい自然に囲まれて行うゼミ合宿は、気分が晴れ晴れとしてリフレッシュすることもできました。

また、合宿の2日目には「就活セミナー」も行われ、4年生の先輩方から就活体験談を



リアルに聞くことができます。学内企業セミナーの活用法や、面接での注意点、時には先輩の失敗談にいたるまで、これからの私たちの就職活動に役立つ貴重なアドバイスをいただきました。ゼミ合宿は、ゼミ論発表会・卒論発表会・就活セミナーと盛りだくさんで、非常に充実した有意義な3日間となりました。

この1年間を振り返ってみると、当初は初めて学ぶ学問に戸惑いや不安があったり、プレゼンの準備やゼミ論作成など大変なことも多くありました。しかし今思うのは、社会言語学は新しい発見をたくさんすることができる素敵な学問であり、今後に大いに役立つことを吸収できるゼミだと感じます。またプレゼンやゼミ論などを通して、大きな達成感を得ることができるのも川成ゼミだからこそです。「言語」に興味がある方はもちろん、自分で研究することの楽しさ、学生生活の充実感や達成感を味わいたい方には、ぜひ川成ゼミで学ぶことをおすすめします。



**3年生メンバー**  
勝浦ゼミ合宿にて  
2018年2月  
↓4年生と合同で



## 「卒業研究」の紹介

4年 秋山 聖奈

自分を成長させられるクラス、川成先生の「卒業研究」について紹介します。「卒業研究」は、基本的には3年次の「専門領域研究講座」、いわゆるゼミからの持ち上がりの必修授業科目です。ゼミでの1年間の学びをもとに、さらに独自の研究を深めることが目的です。

「卒業研究」は私たちの学年からスタートしたので、私たちは「全員が卒業論文制作に取り組む」第一号の学年でした。卒業論文を書くとき、私も当初は不安を抱えましたが、川成先生の熱心なご指導のもと、満足できる卒業論文を書き上げることができました。

まず、3年次のゼミでは、自分たちの専攻する分野についての理解を深め、知識を身につけていきます。川成先生のゼミでは、「社会言語学」に関する文献を、英文・和文どちらのものも扱って授業を進めます。授業の進行方法としては、ひとりひとりが事前に割り当てられた箇所を担当し、レジュメを用意して輪読していく形式です。自分でしっかりと内容を理解した上で、わかりやすいレジュメを作成する作業が必要なため、理解がいつそう深まります。3年次の終わりにはゼミ論文を作成しました。卒論の半分以下の量ですが、形式的には卒論と同じなので、このゼミ論文が後の卒論作成に大きく役立ったと感じています。

4年次にはよいよ自分の専門課題を決めて、卒論制作に本格的に取り組みます。4年次の前半は、3年次同様に輪読の形式で授業を進行しつつ、それぞれの研究の対象とするデータの収集から進めました。論文を制作するにあたって、最も重要なことがこのデータ収集です。データは、映画やドラマの動画やスクリプト、日本語の書籍やその英訳版、あるいはネット上に発信したアンケートの回答であったりとさまざまです。1年間を通して、私は研究対象となる作品と向き合い続けました。後半は、図書館で論文制作を進めつつ、2週間に1回ほどのペースで川成先生の個人指導を受ける時間がありました。この指導の時間で、論文制作の進め方のアドバイスをいただいたり、研究の方向性について話し合ったりしました。1年間向き合い続けてきた論文ですから、提出までたどり着いたときの達成感は何物にも代えがたいものでした。先生からもお褒めの言葉をいただき、この卒業論文が大学生活の集大成であることを実感しました。

この完成した卒論を発表する場が、勝浦のセミナーハウスでの2月初旬の合宿でした。今年度の合宿は3年生と合同で行われ、「ゼミ論発表会」と「卒論発表会」のセッションでお互いの論文を発表し合いました。3年生は、先輩からもたくさんの指摘やアドバイスを受けることができ、より良いゼミ論を完成させるチャンスを得られたと思います。4年生の発表は、2年間の蓄積が実って、メンバー皆の卒論が指摘の余地もないほど素晴らしい出来でした。合宿では発表会だけでなく、もちろん心温まる時間もありました。持ち寄った具材でカレーを作ったり、焼肉パーティーをしたりです。泊まり込みで研究の成果を発表し合

うという学生ならではの経験ができ、学生最後の良い思い出のひとつとなりました。

私は3年次のゼミ論文から4年次の卒業論文まで、一貫してディズニー長編アニメーションを研究対象として扱いました。好きなことがらを研究対象にして、より満足のいく研究をすることができました。2年間を通して1つの学問を深めて、最後に20ページ以上にわたる論文を書き上げることができたことは、私のこれからの人生の誇りになると感じています。将来、「大学で何を学んだの?」と質問されたら、自信をもって自分の専攻分野について説明することができます。ここまで成長することができたのは、川成先生の熱いご指導のおかげです。川成先生のクラスは、ある程度の課題があり、それを期限までにできないと他のメンバーに迷惑をかけることとなります。軽い気持ちではパスできませんが、確実に自分を成長させることができるので、ぜひ川成先生のもとで学んでみてください。



**4年生メンバー**

**勝浦ゼミ合宿にて**

**2018年2月**



**図書館 MLCにて**

**2018年1月**

## ジェシー・グラスゼミ

### **3<sup>rd</sup> Year Juan Xue**

We are so happy that we can take part in Jesse's seminar! We are learning about Western European and Chinese literature in the ancient times in English! As a Chinese student studying in Japan, our teacher Jesse is very kind who firstly gives us a very easy-to-understand puppet play book that combines Japanese and European literature; it is very helpful for us to understand! We were looking forward to playing this puppet play at the Meikai Festival, however, because some students couldn't take this seminar, lacking number, we couldn't do this play with just the two of us Chinese students!

In the second semester, we learned about literature in comparing Europe with China. For example, we discussed the difference between European magicians and Chinese Taoist magicians. I am so surprised that as a foreigner, our teacher knows so much more than we Chinese! Under his guidance, we can have intercultural communication, we know much more than before about China, and I started to learning more about Chinese literature because I feel it is very interesting to learn literature which is so combined with our lives!

We feel so lucky to study under teacher Jesse who knows literature so much! We learned a lot and we started to change our thoughts about our country! I think this is really a good chance for you, if you want to learn more about literature in English, speak in English and improve your skills in English, engage in intercultural communication and play puppets at the Meikai Festival, please come to Jesse's seminar!

### **3<sup>rd</sup> year Meimei Ye**

I am a third-year student in Jesse Glass's seminar. In our seminar, we studied [Faustus and the Golden Keitai ] in the first semester. It is a puppet play for the Meikai International Theater in the Meikai Festival. It was really interesting and all of us enjoyed this play. In order to help us know every role's character well, Jesse gives us many puppets which are made by wood. Because I am from China, Jesse also let me translate this play into Chinese. This was a big challenge for me and I was very happy at my new achievement in the end. Since then, there was no doubt in my mind that I want to continue to do translation.

This semester, we studied about the basic differences between western magicians like Faustus and non-western, Taoist magicians, which we consider representative of magical practices in the East. The basic differences that we consider are of three varieties. The first is time. The second is historicity and non-historicity of the knowledge that gives power to the magician. The last one is Truth. The concept of time is an important underlying principle behind the activities of magicians. In Faust's case, time is chronological like a time line. In the case of the Taoist magician time is eternally present and the activity of the magician springs from a continuous power (like electricity) available through past lives and ancestral spirits. The knowledge that allows Faust to contact Mephistophiles is based on one or two legendary encounters between spiritual powers and humankind. The first basic exchange of information was, according to legend, recorded in the Book of Enoch. Both of these books were said to be the result of a past experience that happened at a particular date and time reflecting the conditions of those times. On the other hand, the Taoist magician relies both on ancient knowledge and present revelations via mediumistic interventions. Contrasting the two points of view was a lot of fun.

Last but not least in Jesse's seminar class, there is only English. As far as I am concerned, it is the best way for us to study English. Not only practice listening but also speaking skills. The insect can take on the color of its surroundings. We also can improve our English in English-only class surroundings.



## 小林裕子ゼミ

3年 白河 光薫



国際政治や世界情勢に興味を持っている方や、身の回りで起きていることに疑問を持つ方、将来のことを真剣に考えている方に小林ゼミの受講をお勧めします。

授業は「何か面白い話ある？」という小林先生の一言から始まります。先生やゼミ生がみんなで共有すべきだと思った話題を共有したり、先生が日ごろの不満や面白い話をしたりします。面白い話がたくさんあると90分通して話すこともあります。勉強の内容は、基本的に先生がプリントしてくださった英字新聞の内容についてみんなで考えを深めていくものです。内容が難しいこともありますが、先生がヒントをくださり、自ら理解できるようになる手助けをしてくださるので安心です。しかし、基本的な英単語や一般常識は身に付けておく必要があります。最低限のことが分からない場合には、いつも優しい先生から危ないオーラがでてきてまれに鬼に変身することがありますので注意してください。

日頃からテレビのニュースや新聞、BBCアプリなどで、どんなことが社会で起きているのか情報収集することが大事です。また、そのことについてただ受け入れるのではなく、問題意識を持ちながら自分の意見や考えを持つことも大切だと思います。

また、授業以外にも、進路に関する悩みや個人的な相談にもものってくださいるのが小林先生です。実際に私も、何度も就職のアドバイスをいただきました。常に生徒たちに寄り添い、愛のある接し方をしてくださるので、私たちも心から信頼しています。小林ゼミは、自



分の頭で深く考えることの大切さを一番に実感できる授業だと思います。めいっぱい勉強できる大学生の今だからこそ、小林ゼミで頑張ってみませんか?! どうぞよろしくお願い致します。

## 卒業研究

### 4年 富山 洋世

GSMを専攻していて政治、経済、文化など世界情勢に関心がある人はもちろん、そうではなく、まだ進路に悩んでいて自分で最善の決定をできていない人、あるいは、世の中に不満を持っている人などに、小林先生の卒業研究受講をお勧めします。

授業の基本的な流れは、先生が印刷して下さった英字新聞を1人1パラグラフくらい目安に音読し、そのパラグラフを日本語で簡潔にまとめます。毎授業、先生が数ある中から厳選した記事を紹介して下さり、特に気になる部分はみんなでその内容を考えそれぞれのアイデアを共有できるのでとても貴重な時間です。英字新聞を音読し日本語で簡潔にまとめるのは難しいですが、分からない場合は先生がヒントをくれます。しかし、ヒントはくれますが、最低限の単語力や世界情勢についての知識は必要です。なぜなら、あまりにも分からないと普段は仏のように優しい小林先生も鬼になり、厳しいお言葉が飛んでくることもしばしばあり、日頃から社会で何が起きているか興味持つことが大切になります。大学でこのように厳しい言葉をかけてくださる先生は稀なので、学生のことを本当によく考えてくれているからだとも私たちは感じています。そして、とても刺激のある授業です。

授業開始してからの数分は、先生が「何か面白い話ある?」とよく尋ねます。これは、笑える意味の面白さではなく、世の中で起きている興味深いことについてです。たまに生活の不満や身近でいうなら電車の中でのマナーなど様々なことについて話し合い独創的な考えを求められます。このような日頃から物事に関心を持ち考えることを習慣付けることで、就職活動の時も周りとは違った視点で物事を考えられるようにもなれると思います。

卒業研究に関しては、多くの人がどのテーマで進めていくべきか最初は悩みます。そういった時でも先生がそれぞれの学生にあったテーマを見つける手助けをしてくださいます。1から10まで教えてくれるのではなく、0を1にしてくれる補助を学生に合わせて行ってくれ、自分で進めつつも迷えば助言してくれるので、どの学生も素晴らしい卒業研究を完成させることができました。

4年生になり就職活動が始動してからも頻繁に学生に進行状況や、自己PRなどのアドバイスをしてくれます。悩んだ時は私たちが最善の選択をできるような叱咤激励もしてくれます。

このように、小林先生は全ゼミ生の特徴を理解していて、それぞれに合った物事の進め方をしてくれます。常に学生の目線に合わせ寄り添って、いつも愛情ある接し方をしてくださる先生はこの大学に小林先生以外いません。そのため私たちの小林先生に対する、信頼と尊敬は計り知れません。このゼミで卒業研究できることはどの生徒にとっても大きな財産になると思います。すぐには気づかないことでも将来きっと私たちの為になることばかりだと信じています。是非、小林先生の卒業研究を受講してみてください。



2017年12月に参加したホノルルマラソンで

## 卒業研究のテーマと概要

- 川合圭太『サッカー留学の現状について』ドイツと日本のサッカープレーの違いを両国民の思考形態の違いに求めた研究。卒業後はドイツにサッカー留学の予定。
- 南雲薪生『自動車と環境問題』自動車が環境問題に与える影響について考察した後、4月から就職するブリジストンのタイヤの性能と環境への負荷軽減について研究。
- 石田丈一『中国での学び』GSMの長期留学で在籍した北京師範大学での一年を振り返り、留学前後の自分の中国観の変化について考察を加えた研究である。
- 川路憲亮『演説が人々に与える影響力』マーティンルーサーキングの演説を分析し、人の心を動かす語りの要素について分析した研究である。
- 小河原夏姫『海外ボランティアに参加して一戦争の悲劇が生んだカンボジア王国―』自らの海外ボランティア体験を振り返り発展途上国が共通に抱える問題点について深い考察を加えた力作である。
- 富山洋世『グローバル社会へ挑戦―中国留学を経験して―』在学時代から旺盛な好奇心を持って東南アジアをバックパックで旅し、さらに中国師範大学への留学体験をまとめ上げた素晴らしい研究である。
- 中村翔太『アパレル業界の現状と今後』在学時代に、数多くの語学研修、海外インターンシップを体験し、日本の文化を発信するパリコレブランドに就職を決めた経緯と、アパレル業界不振の現状を細やかに分析する優れた研究である。
- 青野千華 パワーポイント発表『インターンシップで学んだ事』GSMインターンシップ



に参加して考えた「接客」の意味について考察を深めたプレゼンテーションである。

●大塚花子『親日国ラオスーラオスと日本の関係ー』ラオスと日本の、あまり一般には知られていない経済・文化の深いつながりについて紹介している力作の研究である。

●鈴木彩香『シンガポールー少子化問題についてー』GSM シンガポール研修に参加したのち、シンガポールと日本が共通に持つ少子化問題について多岐にわたるデータを駆使してシンガポールの政策から日本が学べる項目についてまとめあげている。

●北本真唯『インターンシップでの学び』GSM のインターンシップに参加し、インターンシップ制度の在り方について、インターンシップ先進国である米国企業の制度と日本の制度を比較して、本来の制度の在り方に検討を加えている。

●滝澤深幸『日本におけるハラル食品の発展に向けて』大学在学中、数度にわたりイスラム教の国々に旅行したことをきっかけに食のグローバル化と食の宗教性について考察を深めた研究である。

●小淵菜緒『シンガポール研修についてーシンガポールにおける日本企業進出の発展についてー』GSM シンガポール研修で訪問した日本企業の東南アジアにおける販売拡大のための商品開発についてまとめ上げた研究である。

●松本勇人『進む機械化社会ーAI 技術とその将来性ー』AI 技術の進歩により人間の働く場が制限されるのでは、という一般的な切り口とは異なり、人間と AI の根幹的な能力の違いについて考察を加え、AI と人間の本来あるべき分業構造について考察を深めた研究である。

●寺島瑞姫『ダーウィン空襲から見た第二次世界大戦ーオーストラリアと日本の領国の歴史ー』オーストラリアに短期留学した折に知った日本軍によるダーウィン空襲と、日本軍のアジア進出を関連づけてまとめ上げた研究である。特に POW の扱いについて焦点を当てている。



## 嶋田珠巳ゼミ

### 専門領域研究講座

嶋田ゼミは興味や関心をもったことについて主体的に考えて行くゼミです。前期は、気になっている事について書かれている本を読み、どこがどのように気になったか、著者はこういう考えだが私はこういう風に考えるなどの自分なりの考えを添えたレジュメを作成し、ゼミで共有していきます。発表する人だけが一方的に話すので



ではなく、聞いている側も考えを発表していき、1つの興味関心の発表についての幅を広げていく形です。後期は、同じ事について興味を持つ2〜3人でグループになりゼミで発表します。前期での下積みもあるので、的確な考察や意見などもできてゼミ共有の質もあがっていて、また違った楽しみがあります。また、嶋田ゼミに入った前と後では本を読む回数がとても多くなりました。パソコンやアイホン

ではなく本を手取ることで本でしかわからないことを知れる機会にもなるとおもいます。

嶋田ゼミは、「ことば」について知れるゼミです。なぜ日本語は世界共通ではないのか、方言の敬語はどのような扱い方をされるのか、日本の英語教養にいてどう思うか、現代の時代に生まれた若者ことばはどういったものなのか等、幅広いことばの在り方に関してわかるゼミです。ゼミ全体での議論が多いゼミなので毎回のゼミが明るくて楽しいです！ことばについて興味や関心、すこしでもことばについて知りたい人は是非とも入る事をオススメします。(村田涼)

嶋田ゼミは、それぞれの興味をととても大事にしている、どんどん個性を伸ばしてくれるゼミです。今年度のゼミでは、主に自分の興味を持ったものについて、発表を行いました。

私たちゼミ生のほとんどが、本を読むことに対して苦手意識を持っており、本を読む習慣がなかったため、前期ではテーマは自由でそれぞれに興味を持った本をみんなに発表するというを行いました。発表と聞くと、ただ発表者が内容を発表するだけかと想像する人も多いかと思いますが、嶋田ゼミではそうではありません。ゼミ生全員と先生が一丸となって発表を行います。というのは、聴衆はただ発表を聞いているだけでなく、質問、疑問、考えたことを全員で共有し、話し合います。「なんでこうなるのだろう?」、「ここが分かりやすかった!」など、改善点や良かったことなどをとことん話し合うので、物事を考える力、相手に分かりやすく伝える力、自分の意見を言う力、また、聞く力が嶋田ゼミではつくと思います。嶋田先生は悪かった点はしっかりと指摘し、どうしてもより良いものができるかをアドバイスしてくれます。なので、自分には何が足りないのか、次はどうしたらいいのかを明確にすることができます。また、大阪出身の嶋田先生が作り出す暖かい空間のおかげで、みんなも素直に意見を言うことができ、お互いに成長することができます。私自身、嶋田ゼミに入る前は、自分の意見が

あったとしても声に出してみんなと共有することがとても苦手でした。ですが、今では、ゼミ以外の場面でも自分の意見を言うことができるようになりました。



後期は、「ことば」をテーマに興味を持った本について個人やグループに分かれ、その本の一章について発表を行いました。「トーク・

バラエティの原点としての生活言葉」、「日本語が死ぬ 5 つの可能性」、「日本語は国際語になりうるか」、「英語らしさと日本語らしさ」についての発表がありました。前期の発表での改善点を見直し、後期の発表はより良いものとなりました。

ゼミ合宿では、昨年度のゼミ生も合同で、勝浦のセミナーハウスで行いました。そこでは、四年生の卒業論文の中間発表や、四年生から三年生に向けて、就職活動へのアドバイスをしていました。就職活動に向けて、不安や心配をしている三年生が多かったので、とても実りある時間を過ごすことができたかと思います。夕食はみんなまでバーベキューをしたり、花火をしたり、ジャグジーに入ったりと、ゼミ生みんなで会話ができて、よりいっそう仲が深まりました。

嶋田ゼミでは学習面ではもちろん、分からないことは一から教えてくれるので、たくさん吸収できるゼミです。嶋田先生はゼミ生ひとりひとりと真剣に向き合ってくれるので、まだ自分が何に興味があるかはっきりしていなくても、必ずなにか見つけることができると思います。また、嶋田先生は本当に明るく楽しんで笑顔が絶えません。真面目にやるときは真面目に取り組み、楽しいときはとことん楽しむので、毎回ゼミが楽しみでした。嶋田ゼ



ミは、自分を成長させたい人や、自分の興味を知りたい人、人前で意見が言えるようになりたい人や向上心のある人にとってもおすすめです。私は嶋田ゼミで、自分でも一年間で色々と成長したと感じているので、本当に入って良かったと思います。是非、嶋田ゼミで新しい仲間と素晴らしい経験をしてみてください。(渡邊恵美)

2017年8月勝浦での合宿(みんなでバーベキュー)

## 卒業研究

今まで本格的な議論の場というのがなかったのですが、嶋田ゼミにて実際に議論する機会を得ることができました。例えば自分の考えについて他の人達は別の意見があり、参考になることが多かったです。私は嶋田ゼミを通じて議論及び発信の重要性を学び、より考えを深めることができました。この事は将来、就職した後とても役に立つ事です。嶋田ゼミに入って本当に良かったと思います。(松浦有沙)

私は、嶋田ゼミで勉強した二年間で、自分の考えを伝えるということを鍛えられたと思います。とっさに指名された時でも対応できるようにすることや、同じ内容でも言葉を何か添えて発言することを日頃から言われてきたので二年前よりは成長できたと思うので、嶋田ゼミに入って良かったです。(須合怜帆)



#### ある日の卒論ゼミ

僕が嶋田ゼミに入り学んだこと、それは読書の大切さです。3年時のゼミに入りたての頃、僕らゼミ生に先生は読書の大切さを伝えてくれました。当時の僕は、読書が大嫌いであり気が進みませんでしたが、今では毎日、本を読むようにしています。それもあの当時、先生が優しく読書の大切さを伝えてくれたお陰です。キッカケを作ってくれた先生には実はとても感謝をしています。他にも書ききれない程、学ぶことが多々ありました。(高瀬稜)

卒論は、どのテーマで進めて行くべきか最初は悩みました。そうゆう時でも先生は親身になりそれぞれの学生にあったテーマを見つけてくれる手助けをしてくれました。嶋田ゼミは全ゼミ生の特徴を理解して、常に学生の目線に合わせ寄り添って、いつも愛情ある接し方をしてくれました。将来は先生みたく人に愛情ある接し方をしたいと思います。ありがとうございました。(山口雅生)

3年生から嶋田先生のゼミに入って、慣れないうちは発表の多い嶋田ゼミが苦手でした。しかし数をこなしていくうちに発表にも慣れて発表のクオリティをみんなで競い合うように上げていきました。発表自体も嶋田先生のお陰で和やかな雰囲気が進められて楽しく出来ました。4年次では嶋田先生とのマンツーマンの指導も加わって卒業論文を作成しました。嶋田先生の手厚いサポートによって卒業論文は完成度の高いものを作ることが出来たと思います。ゼミの授業でも嶋田先生明るく場を和やかにしてくれたり、繰り返しの質問でレベルの高い議論を重ねてその授業のテーマに対する私達の理解を深める手助けをしてくれました。明海大学にはこのような先生は



少ないと思います。嶋田先生の下で学び、色々な視点からモノを視る事が出来ました。(宮崎裕次郎)

ゼミでは自分の関心のあることを突き詰めて、卒論のテーマ設定を行いました。ゼミ内で定期的に行う発表では、様々なテーマの発表を聞くことで新しいことを吸収できたので、とても楽しい時間でした。卒論や就活のことで行き詰まっても、何でも相談できる環境があったので良かったです。(安里真由子)

主に卒業論文に向けてのゼミでした。無事書き終えることができるかと心配でしたが、卒論を書き進めていくにつれ、新たな関心や疑問を見つけることができ、とてもやりがいがありました。僕は、「日本語の短縮語の生まれかた」という題名で卒論を書きました。日本語の名詞の略語にもパターンがあり、例えばなぜ「携帯電話」は「携電」でなく「携帯」と短縮したのかという疑問も、様々な視点から考察することができました。他にも、なぜ「スマホ」でなく「スマホ」なのかなど、普段よく使う短縮語ですが、じっくり考えるとおもしろい発見がありました。(草薙涼)

嶋田ゼミでは、グループワーク、卒論準備としてたくさん発表しました。議論型発表会では、大学院生や他の先生方のアドバイスをもらうことで、自分が聞き手に1番伝えなかったことがわかり、どう工夫したらもっと良く伝えられるかを学ぶことができました。卒論では日本の非言語コミュニケーションについて書きましたが、そのテーマは自分が1番やりたかったのかと感じました。でも仮提出で先生からのフィードバックを頂き、自分の思いを伝えられたので良かったです。(片桐亜希子)

3年生から2年連続同じゼミで、空気感が変わることなく2年間過ごすことができました。卒論ゼミでは、自分の興味があるテーマを先生が尊重してくれました。一度提出した際には、隅々まで読んでくださり誤字や卒業論文の書き方など細かく指導してくれました。そのため最後まで卒業論文を書くことができました。(鵜澤匠)

#### 履修者14名の卒業論文

- 文法構造上主語省略不可能な言語において日本のお笑い文化同様に手短かにツッコムことは可能か 鵜澤匠
- マニュアル敬語—発生と普及の理由にみる必要性 須合怜帆
- 関西人が東京人とコミュニケーションする時の「やわらか関西弁」 青柳竜平
- 日本語話者の会話における視線 山口雅生
- 若者言葉であろう「じゃん」～様々な面から見た「じゃん」の作用～ 山崎さやか
- オリンピックの開催に伴う道路標識等の表記の変更 松尾純平
- 日米非言語コミュニケーションの実際 片桐亜希子
- [「犬」/“dog”]が用いられた熟語・ことわざ・慣用語～寓話や聖書から[犬/dog]のイメージを考える～ 安里真由子
- 動物愛護後進国日本の現状と課題 向後寿々音
- 擬音語大国ニッポンと呼ばれる日本～日本語からオノマトベが無くなってしまったら～ 眞弓綺袈
- 日本語の短縮語の生まれかた 草薙涼
- 日本人が英語を学ぶうえでの壁 松浦有沙
- 音楽販売の主流は、CDから配信へ 高瀬稜
- もし日本で英語が公用語になったら～他国の英語事情から日本の英語を考える～ 宮崎裕次郎



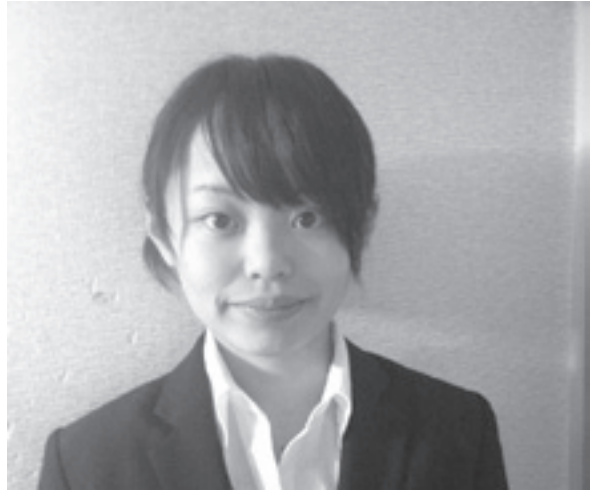
第4回議論型研究会で  
青柳くんの発表を聞く

## 高田智子ゼミ

### 卒業研究で学んだこと

4年 山本 紗和

私は卒業研究で、「高校生用 CLIL 教材の作成」をテーマに、コミュニケーション英語1の学習指導案をつくりました。CLILとは英語教授法の1つで、英語の4技能を勉強しながらその題材内容についても同時に学習するものです。きっかけは、平成28年度開催の関東甲信越英語教育学会で拝聴した小金丸倫隆先生（神奈川県立光陵高校教諭）の「普通科高等学校における CLIL 導入の試み」に感銘を受けたからです。そして今年度の卒業研究で、実際に教材を作りたいと思い、実践しました。



研究の手順としては、まず教材のトピックを決めました。私はもともと少数民族に興味があり、中でも北海道の原住民であるアイヌ民族が好きでした。ですから、「アイヌ民族の文化と歴史」をテーマにすることで、それらのことがらを生徒に伝えることを狙いとしました。トピックを決めた後は、授業で扱うパッセージづくりを行いました。これがこの研究で2番目に大変でした。特に苦労したことは、アイヌ民族に関する易しい英語の著書を探すことと、その本文を、高校生に読みやすいように編集したことです。大学や地元の図書館をいくつか巡って、やっと読みやすい絵本を見つけられた時はとても嬉しく思いました。本文の書き直しには時間がかかりましたが、たいへんいい勉強になりました。なにより大好きなアイヌ民族についてこんなにじっくり学んだことは、教材づくりという本来の目的を忘れるほど楽しい時間でした。

そして最後の指導案作りでは、いかにして CLIL らしい構成の授業にするか、が一番の焦点となりました。生徒がアイヌについてさまざまな思考力を働かせられるような指導方法を、何度も検討しました。これが1番大変でした。なかなか適した発問や言語活動を作れず、提出期限の迫る12月になって、リーディング指導の文献を参考にしながら様々な思考力を働かせる設問を作成し、冬休み中にすべて完成させました。CLILや高校の一般的な英語指導について、もっと早くから勉強しておくべきだったと反省もありますが、たしか

な達成感があります。もしもこの先、機会をいただけることがあれば、指導案の内容をもっと高校生の実態や興味・関心にあったものにし、なおかつ CLIL 要素をより含んだものへとブラッシュアップさせたいと強く思います。

以上のような研究をして参りましたが、何はともあれ、こうして指導案を完成させることができたのは、高田教授のご指導と、ともに学んだ大塚さんおかげだと心から思います。楽しく充実した1年間を、本当にありがとうございました！

## 洋楽を通して英文法を教える

4年 大塚 桃加

私は高田先生の研究室で、フォーカスオンフォームを用いて「洋楽を通して英文法を教える」ことについて研究しました。フォーカスオンフォームとは、意味の伝達を中心とした言語活動のなかで、学習者の注意を言語の形式に向ける指導法です。歌には作詞者・作曲者が伝えたいメッセージがあります。それを味わいながら、繰り返し使われる文法項目を教える指導法を考えました。

フォーカスオンフォームや CLIL (Content Language Integrated Learning) についてほとんど知識がなかった私に、高田先生は1つ1つ丁寧にご指導してくださいました。私は、好きな洋楽を使って英文法を教えることをテーマにしました。先生は、曲の選び方から、曲を通して英文法を生徒に教える時の方法まで、一緒に考えてくださいました。さらに、NHK ラジオ『短期集中！3か月英会話—洋楽で学ぶ英文法』も先生が紹介してください、大変親身にアドバイスをしてくださいました。

私は東京都教員採用試験に合格し、4月から中学校で教壇に立って英語を教えます。こ



の研究室で学んだことをしっかりと活かしていきたいと思います。授業で洋楽を通して英文法を学んでいく中で、英語が好きな生徒はさらに英語好きに、英語が苦手な生徒は、少しでも苦手意識を軽減できるようにしていきたいと思います。

教職を履修しているみなさんはもちろんのこと、教育に興味がある人やそうでない人も、高田先生の研究室では、将来役に立つ研究をすることができますと思います。ぜひ、この研究室にいらしてください！

## 高野敬三ゼミ



### 3年 佐々木 健

高野ゼミは、教育への関心を深める学びの場です。

学校教育の根幹を成す、学習指導要領を昭和の「試案」から振り返りながら、それを叩き台として戦後から今日までの教育にフォーカスを当て、学習を深めています。

温故知新、という言葉が示すとおり、教育の歴史の中には昨今騒がれてる問題の解決のキーとなるようなヒントが散りばめられています。

将来、教職の道を志している方であれば、とても有意義な時間を過ごすことができると思います。ぜひお越しください。

### 3年 荒井 克也

ゼミというのは専門分野をよりきわめるためにある授業であるため、基本的に教授が授業をするのではなく、教授から与えられた課題を学生が各自で事前学習をし、それについて学んだことや、自分がどのように思ったのかをレポートにまとめておき、ゼミの時間に発表する授業です。人によってまとめ方が異なるため、ゼミ生の発表を聞くことでどのようにまとめればわかりやすいか学ぶことができ、4年時に行う卒業研究にもつながります。

### 3年 富塚 虎太

高野ゼミは戦後から現在までの英語教育を振り返りこれからの英語教育について考えていくことを目標に活動しています。講義内では学習指導要領を各年予め読みまとめ、議論を



交わし過去の英語教育を深めています。近頃、新学習指導要領が出されて、小学校の英語が教科になり、また、大学受験では外部試験の取り入れ等日本の英語教育が熱いです。高野ゼミは大学外でも交流が多く、大学生生活をより充実させていただきました。

### 3年 内山 葉月

高野先生のゼミでは、これまで世に出されてきた学習指導要領を教材とし、今日本がどのような教育を行ってきたのか、これから日本はどのような教育を行わなければいけないのかを学び、考える授業を受けています。高野先生は以前東京都の教育委員会でお仕事されていたため、学習指導要領を通し様々な教育に関することを教えてくださいます。また、ゼミでは学習指導要領を1から学べるため教職履修者以外の学生も入って楽しく学べます。教職履修者はもちろん、教職を目指していない学生もぜひ履修してみてください。

### 3年 脇山 清美

高野ゼミでは英語教育について学びます。昨年度は英語教育大論争や昭和から平成の学習指導要領の変遷をみていき、その時代の教育の在り方などを学んでいきました。また、昭和の外国語教育で実際に使われていた外国語の教科書や、2020年度から全面实施される小学校の外国語教材などの貴重な資料をみることができました。ゼミ履修生は教職課程を履修していなくても教育に興味のある方にはとても興味深い内容になっていると思います。

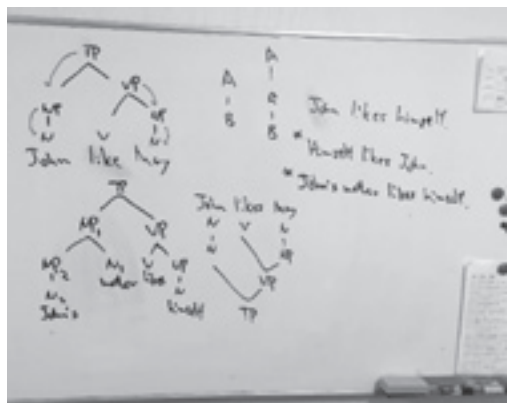


## 瀧田健介ゼミ

### 専門領域研究講座

3年 久木田 愛莉

瀧田ゼミでは、ことばの「なぜ」について、言語学、特に生成文法の観点から考えていきます。文法やルールとしては知っていても、それがなぜなのかを突き詰めて考えると新しい発見が多くあります。2017年度の瀧田ゼミでは、“Syntax: A Generative Introduction”という洋書のテキストを用いて授業を進めました。ここで一つ問題です。“The man killed the king with the knife.” これは実際にテキストに出てきた例文ですが、皆さんはこの文の解釈として、誰がナイフを持っていたと解釈したでしょうか。(1) その男がナイフで王様を殺した、でしょうか、(2) その男がナイフを持った王様を殺した、でしょうか。実はどちらの解釈も正解です。では「なぜ」一つの文で二つの解釈ができるのでしょうか。ここで生成文法の考え方が、どちらの解釈も正しいことを証明してくれるのです。ゼミ生は、このようなことばに関する「なぜ」をゼミ論としてまとめていきます。ゼミ論のテーマはことばに関することが条件です。ゼミ論を通して自分で考えることが、自分の中にある「なぜ」を深め、解決する糸口となります。前・後学期にテーマ発表と研究発表があり、そこで同じゼミ生や先生からアドバイスをもらったり、意見を交換したりします。



このゼミの魅力は、少人数制で個々の理解が深まる授業にあります。テキストを進めて行く中で疑問があれば皆自由に発言し、それに対して瀧田先生が解説をしてくださいます。言語学は科学と同じように反証を考えることが大切です。そういった意味でも、自分の考えや理解を論理立てて考えることが身につけていきます。生成文法という、多くの人にとっては新しい考えに触れるゼミではありますが、同じゼミ生や先生のフォローできっと解決までたどり着けると思います。

1年間を通して、私が感じたのは、ことばについての難しさよりも面白さです。なんとなく、で英語を勉強するのが苦手で、自分の理解できないことをとことん突き詰めて考えたい私にとって、このゼミはぴったりだと思っています。「これはこうだから覚えるしかない」とするよりも、理由や根拠があって理解できた方が楽しいし、意義があると思います。また、そんな私に、親身に納得いくまで付き合ってくくださった瀧田先生には、本当に感謝しております。先生との距離が近いことも、このゼミの魅力です。

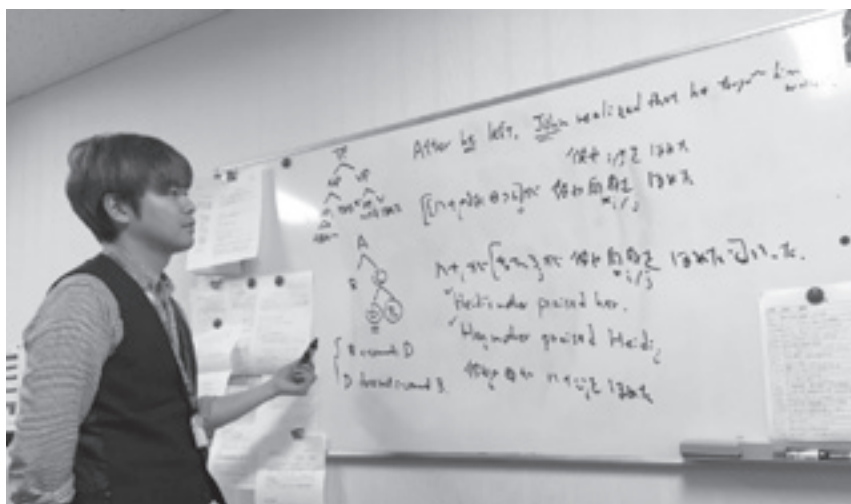
英語への「なぜ」を抱えている方は、是非瀧田ゼミを検討してみてくださいはいかがでしょうか。

## 卒業研究で学んだこと

4年 高橋 俊成

この授業での主な研究内容は、英語における文法の要素などについて学んでいくことにあります。日本語でも、英語をはじめとする外国語においても長い短い関係なしに文というものを作るときに、その文はなぜこのような構造になるのだろうか、この単語の組み合わせは文として成り立つ、しかしなぜこの単語の組み合わせでは成り立たないのであるのかななどを考えます。そして、これらのような内容を授業内で使用するテキストなどで文の中の構造や要素がどのような形式になっているのか自分自身の考えで考察をしていきます。最後に、これらの学んできたことをもとに、最後の卒業論文・卒業レポートにむけて自分の研究テーマやその考察などをまとめていくということが目標となります。

自分は文が成り立つにはどのような要素が必要になるのかというような疑問を感じており、文法や言語において文が構成される要素である統語論などについて詳しく学びたいという理由で選択しました。「なぜこのような形では文として成り立つのにこの形では文としてなりたたないであろうか。」といった疑問や、「単語の一つ一つに意味がある。」という言葉がこの卒業研究が始まる前に聞いたことがあり、その言葉についての答えを知りたい、単語の詳しいことは勿論、単語を形成することで完成する英文や英文法について今までよりももっと詳しく、学びたいという考えのもと、この授業で自分が疑問に感じていたこと、興味をもったことなどについて学び、研究することを決めました。英語の文について何か疑問に感じることもある、英文法の要素をもっと深く学び、研究してみたいというような考えを持つ方々が向いていると思います。



## 津留崎毅ゼミ

### 「専門領域研究講座」について

3年 渡邊 美保

今年度の津留崎ゼミ「専門領域研究講座」では、「人称代名詞と照応」をテーマに、前期は、*The Cambridge Grammar of the English Language* (CGEL) の Chapter17 ‘Deixis and anaphora’ を、後期は、代名詞照応に関する問題とバック・ピーターズ文の謎の解明に主として取り組みました。

前期の授業は、CGEL の Chapter17 の割り当てられた数ページをよく読み、その内容を説明するためのハンドアウトを作成し、発表することが中心でした。いざやってみると、難しい単語や言葉がでてきて大変でしたが先生がわかりやすく解説してくださって少しずつ理解することができました。夏休みには、鈴木孝夫著『ことばと文化』を読み、ブックレポートを提出する課題が出ました。これは、言語と文化に関する入門書のようなもので、ゼミ論執筆の基礎となり、私たちゼミ生にはもってこいの本でした。12月からは、ゼミ論執筆のため、この『ことばと文化』の第6章について詳しく学んでいきましたが、同時に、「バック・ピーターズ文の謎」の解明にも取り組みました。この「謎」の解明はかなり複雑なものでしたが、先生がわかりやすく、また繰り返し解説してくださったので、何とか理解することができたように思います。

津留崎ゼミでは、普段触れないことば、聞かないようなことばがたくさん出てきます。しかし、普段触れないからこそ知りたいと思いました。また、今まで何気なく読んでいた文章や聞いていたことばでも、人称代名詞や文の構造に注意しながら読むようになりました。

津留崎先生、1年間ありがとうございました。

### 「卒業研究」について

4年 崎山 日菜子

津留崎ゼミ「卒業研究」では、3年次までの学習や研究の成果を踏まえ、「ことば」に関する調査・研究のテーマを設定し、客観的な視点でデータ分析を行い、それを卒業論文もしくは卒業レポートにまとめることに取り組みました。

いきなり、卒業論文・卒業レポートを書きなさいと言われても、戸惑う人が多いと思います。しかし、津留崎ゼミでは、先生が「論文・レポート執筆のいろは」を教えて下さいますので、心配は不要です。授業は田中典子著『はじめての論文：語用論的な視点で調査・研

究する』に沿って進んでいきます。この一冊の中に、リサーチとは何か、なぜ先行研究を調べるのか、アンケート調査で注意すべきことは何かなど、論文やレポート執筆の必須知識が詰め込まれています。そして、自分として「興味・関心の持てるテーマ」を見つけ、少しずつ論文もしくはレポートの執筆を進めていきます。

自分として「興味・関心の持てるテーマ」を見つけることは、簡単ではありません。しかし、折に触れて、津留崎先生が「こんな研究はどう？」と参考資料を配ってくれたり、研究に使えるようなテーマを紹介してくれたりするので、最終的には、自分の興味の持てるテーマを見つけることができると思います。

私は、森雄一氏の「命名論における表示性と表現性：米の品種を題材に」という論文を読み、「表示性」と「表現性」という概念に興味を抱きました。そして、この「表示性」と「表現性」は、米に限らず様々なものに当てはめて考えることができるのではないかと思い、自分の好物である「柑橘類」に当てはめて卒業レポートを完成させました。

卒業レポートを提出してみて、一つのレポートを完成させるのにこんなにも時間を費やし何冊もの本や論文を読んだのは初めてでした。私の場合、特に苦労したのは情報収集で、特に、自分の書きたいことに関する参考文献や参照文献を見つけることには大変苦労しました。何度も何度も添削やアドバイスをもらいながら完成したレポートは、今まで他の授業で提出したレポートとは比べものにならないくらい自分でも納得のいくものになり、充実感でいっぱいです。

卒業レポートや卒業論文について心配なことは沢山あると思いますが、津留崎先生はそんな不安な気持ちを払拭してくれるような熱心な指導をしてくれます。この卒業研究で学んだことは、どんな形であれ将来の糧になると私は思います。津留崎先生、本当にありがとうございました。



## 内藤貴子ゼミ

### 専門領域研究講座



♪ピーター・パン班

3年 戸室 菜々子・稗田 美穂

まずグループ研究についてですが、私達はピーター・パンについて研究しました。大学生らしく論を立てた発表をするために、最初はしっかり作品を読み、気になる箇所に関する先行論文を探します。次に、自分なりの研究の切り口を決めるのですが、この切り口に不正解はなく、自由な視点を持つことが重要であり、新しい発見を通じてより作品に対する理解を深めることが大切です。そして、発表が成功した時の達成感は大学時代の良い思い出になること間違いありません。

♪さて、次に我が内藤ゼミを紹介します。内藤ゼミは英語圏の児童文学を研究するゼミですので、読書好きの方にオススメです。英語圏の児童文学をあまり知らない方でも心配ありません。なぜなら、想像を超える様々なジャンルの本に先生が出会わせて下さるから



です。また、ただ読むだけではなく、ディスカッションもするので、視野が広がる意見交換をすることができます。それから、クリスマス会などのイベントが豊富なことも

特徴です。そして、内藤先生はいつも私達を温かく見守っていて下さり、いわばゼミの母のような存在です。

#### ♪ピーターラビット班

私たちのゼミでは、



グループに分かれ文学作品を読み、参考文献を探し、その作品の切り込まれていない視点、調べられている視点を更に深く調べ、それぞれ発表しました。

私達のグループは「ピーターラビット」について調べ、人間が与えるリアリティーに焦点を当てました。人間が登場するシーンは肉食動物のような強い動物ではダメだったのか。そこで作者の育った環境や、作品をグループで調べ、人間が登場する事で伝わる動物らしさ、リアリティーが読み手に伝わるんだと考えました。このように、ひとつの視点に絞るのに沢山悩みました。しかし、悩み話し合うことで、自分だけでは見つけられなかった作品の切り込み方、考え方を発見できました。

♪課外活動は文学にまつわるイベントを企画し、子ども絵本館やピーターラビット展に行きました。また、後期から加入したメンバーの歓迎会や映画鑑賞会を兼ねたクリスマス会、親睦をさらに深めた新年会など様々なイベントを行いました。今後は泊りがけのイベントも考え中です。

読書会では、ヘンゼルとグレーテルという有名な昔話の魔女が主役のスピノフのような作品や、湾岸戦争が舞台となった作品、大きなイチイという木の怪物と少年の心の成長を描いた絵本を読み、今までは悪者だと思っていた魔女の本当の姿を知り、なぜ作者は湾岸戦争を舞台に選んだのかを考え、怪物が子供にどんな影響を与えるのかなど様々な疑問を、先生やゼミの仲間とディスカッションをしました。就活のグループディスカッションの練習も兼ねており、正解ばかりを問い詰めず、発言することを恐れないようどんな意見にも耳を傾け、最初は苦手だったディスカッションがだんだんと上達していきました。



興味を持った方、本が大好きな方、読書に挑戦してみたい方、ぜひ内藤ゼミへ!!

## 藤田智子ゼミ [後期・内藤貴子]

### 卒業研究

社会学的なアプローチから各自のテーマに取り組み、卒業論文が3本提出されました。

「子どもの貧困と社会的包摂——子ども食堂から考える」

「なぜラブライブは人気なのか？——聖地巡礼によるサブカルチャーの大衆化」

「LGBTは受け入れられてきたのか——メディアの影響を通して考える」



#### 4年 木原 拓実

私はアニメ『ラブライブ!』が人気の理由を「聖地巡礼」から考えて研究しました。きっかけは2年前に家族との旅行でたまたま静岡県沼津市に行った事でした。当時は特に興味がなかったのですが、聖地巡礼をしに来たであろうファン(ラブライバー)が沢山いた為、そして自身でも聖地巡礼をし、その体験が印象深かったので、聖地巡礼にやってくる観光客と、観光地や地元の人たちにどんな影響を与えるかを観光社会学の観点から研究を始めました。大変だったのは、『ラブライブ!』に関連する文献が非常に少なかったので、資料やデータ集めに手間取り、文章を書くのが遅くなってしまい、先生に何度も見て貰いながらギリギリまで書き直していました。しかし研究をしていて楽しかったこともありました。それは内容分析をする上で『ラブライブ!』をアニメで何度も見返すことが多くありました。そして何度も見返す内に私も次第に『ラブライブ!』に魅了されて、気が付けば私もラブライバーになってしまいました。論文は大変でしたが、今では私もラブライバーとなり作品を応援しています!



#### 4年 佐々木 冨

私は「LGBT」をテーマに卒業論文を書きました。日本における LGBT 当事者の割合は8%。日本の人口の13人に1人(左利きやAB型の人の割合と同じ)とされています。テレビなどメディアで当事者の有名人が取り上げられているものの、あくまでも「テレビの中の話」であり、実際には知名度や理解にはまだまだ不十分です。なぜ理解が足りていないのか、当事者たちはどのようにして生活をし生きづらさを感じているのか、インタビューをしました。そしてこの研究をして、私たち(ストレート)が普段、普通に生活している中にも当事者にとっては「生きづらい」と感じていることがあり、さり気ない言動で傷ついている当事者がいることに気づきました。このような当事者から聞かなければ分からなかったことを、卒業論文を通してたくさん知ることができました。

#### 4年 岩澤 里菜

私は卒業論文のテーマに「子どもの貧困と社会的包摂——子ども食堂から考える——」にしました。自分の海外ボランティアの経験から貧困について考えて、卒業論文のテーマに挙げて、研究しました。研究の方法として、私は実際に開催されている2ヶ所の子ども食堂にボランティアとして参加し、調査しました。そこは、自分が想像していた場所とは少し違いました。食事を食べられないような子どもが来ると思っていたのですが、目に見えて貧困状態にある子どもは参加していませんでした。参加していないというより、運営している子ども食堂が参加出来ない状態を作り出しているという現実を知りました。その例として、夜ご飯を食べるにはお金がかかる。他にも、夕方から夜にかけて開催されるので、親子関係が良好でないと参加するのが難しい、といったような事が多くあげられました。この研究の結論として、子ども食堂は直接的な貧困対策ではないと分かりました。しかし、異世代交流をする事が出来たり、困っている人を地域で守るといったような居場所としての機能は発揮していると感じました。春から介護士として働く私にとって、地域との関わりや異世代交流の大切さは十分に感じています。今後は、休日にまた子ども食堂にボランティアとして参加して、更に知識や理解を深めたいと思いました。



## ケイコ・ナカムラゼミ

### 専門領域研究講座

Our zemi examined various topics in the field of psycholinguistics. During the first semester, we started by looking at animal communication, watching videos of different animals (e.g., gorillas, chimpanzees, dolphins, whales, birds, dogs, cats) and studying different animal communication strategies, to see whether they actually might have “language.” Next, we looked at first language (L1) acquisition, exploring language development in infants (e.g., babbling), toddlers (e.g., one-word utterances), preschoolers (e.g., development of tense), and schoolchildren (e.g., acquisition of pragmatic skills). We then moved on to second language (L2) acquisition and bilingualism. At the end of first semester, we did article summaries on a topic of our choice, presenting them in class, with peer reviews. The members of the zemi were interested in language and communication in general, with some more curious about animal communication, and other more fascinated by L1 and L2 language learning in children and adults.



The second semester, we worked on our zemi projects. We had a wide variety of topics:

#### **Animal communication**

- 人間とイルカのコミュニケーションについて (Yuki Saito)

#### **First language (L1) acquisition/development**

- 母言語習得時における親や環境によるイントネーションへの影響 (Yuhei Saito)
- 子どもと絵本 (Miho Ishii)
- 第一言語発達、言葉の発達を促すものは何か (Aya Watanabe)
- コミュニケーション能力について (Asuka Osato)

#### **Second language (L2)/ Foreign language acquisition**

- 英語教育の早期化 (Kanna Sato)

- セミリンガル・ダブルリミテッドの危険性と対応（幼児英語教育に適した年齢と学習法）（Shuto Nakagawara）

### **Bilingualism/Multilingualism**

- Multilingualism in Nepal (Arjun Upadhyay)
- Trilingualism (Chamanie Pathiraje)
- 在日韓国人または韓国系日本人の家庭内での言語活動について（Tetsu Kamikawa）
- バイリンガル児のコードスイッチングについて（Yuka Tateishi）

### **Language Varieties**

- 手話という言語と聴文化とろう文化の理解（Satoko Tamura）
- カナダ英語とは（Rui Nakano）
- Chinese Expressions with Amazing Literal Translations (Li Pancan)

### **Social Issues**

- 私たちの周りにある身近な偏見について（Mami Oyama）
- 家庭内暴力について（Ryunosuke Koyama）



At the end of the year, we completed a questionnaire about the course. The zemi members wrote that they enjoyed:

- the freedom and flexibility they had in choosing a topic
- studying about one specific topic in depth
- conducting research at one's own pace
- learning about different research methods
- receiving constructive feedback regarding projects from the instructor and classmates
- being able to use both English and Japanese
- engaging in discussions
- actively engaging in learning and research
- doing presentations with powerpoint
- practicing conducting and writing up research in preparation for next year's graduation thesis
- working in a relaxing, friendly, and supportive atmosphere

We had an extremely productive year and are looking forward to working on new projects for our graduation theses next year!

---

## 卒業研究

This year, we had six students in the graduation thesis course. We spent the first semester covering the basics of conducting independent research: finding a topic, doing a literature review, designing a research methodology (e.g., practicing interviews, questionnaires, observations), collecting and analyzing data). Each student actively selected their own topics and prepared a research proposal, which they presented at the end of the first semester. Toward the end of the first semester, students started to collect their data and continued to do



so through the summer. In the second semester, we worked on writing up the individual parts of the research paper with students handing in their first drafts in December and writing additional drafts as necessary before the final deadline at the end of January. On the last two days of class, each student gave a 30-minute presentation, followed by discussion and feedback.

### Graduation Theses/Projects

- Asian students studying in Japan (Guan Shan Shan)
- The education system in Nepal (Budhathoki Magar Kopila)
- 東京五輪がもたらす訪日外国人への日本政府と企業の政策と働き (Kazuya Shibata)
- 人工知能による生活の変化 (Noriko Yamamoto)
- Performance (song & guitar) by Shun Utsugi



Shun Utsugi

Three of the graduation theses were data-based research projects; two were in English and two were in Japanese. One graduation project was an impressive vocal performance “Shun Utsugi- Special Live” with guitar accompaniment reflecting over Shun’s past four years at Meikai which brought tears to our eyes. Both the music and lyrics were written by Shun and they were very moving for all of us.

We had a wonderful year working together, with the ups and downs of post-graduation plans throughout the year. I wish everyone the best of luck in their new lives after graduation from Meikai!



Guan Shan Shan



Kazuya Shibata



Budhathoki Magar Kopila

## 原和也ゼミ

### 専門領域研究講座

3年 佐藤 るり

巷では「コミュカ」「コミュ症」といった言葉が当たり前のように使われていますが、私にはその言葉「コミュニケーション」が指す実体がどうしても掴めませんでした。コミュニケーションと一口に言っても、単に向かいあって言葉を交わすだけではありませんよね。言語以外にも人間の交流には表情やちょっとした仕草が含まれていて、それも基盤をつくる社会や文化次第でガラリと変わります。例えばネイティブの先生と話していて、眉間にしわがよっていくのを見ると、変な事言ったかしらと不安になりますが、決して不機嫌な訳ではないのですよね。顔をしかめるほど真剣に聞いてくれている証拠だったりします。なんだ、そんな事かと思われるかも知れませんが、私にとってはかなり衝撃的な経験でした。文化によって伝わり方にこんなにも違いがあるのかと恐ろしくなった一方、面白いなと好奇心をくすぐられる発見でもありました。原先生のゼミでは、そんな文化や心理学の観点から見たコミュニケーションを扱います。日常に転がっている小さな疑問を面白くし



てくれるスコープを養うことが出来るのです。

でもこのスコープ、ゼミに入れば誰にでもプレゼントという訳ではありません。自分たちで勝ち取らなくてはなりません。原ゼミではリーディング PACKET といって、コミュニケーションに関する文献を集めた冊子が配られるのですが、この中から1つテーマを選んでゼミ生に向けて発表をする必要があるのです。PACKETの内容をまとめたハンドアウトを作る、図書館で参考資料を探し出す、実際に一人で口に出してみる…といった準備作業はなかなか孤独で大変なものがあります。しかし、1から10まで先生に教わるのではなく、6から10くらいまでは自分たちで何とかしてみるといった習慣を続けてみると、物事に対する探究心や理解が自分でも驚くくらい深まるのが分かりました。用意していた議題に差し掛かったとき、皆が真剣になって答えを考えてくれたのが本当に嬉しかったのも鮮明に覚えています。打てば響くといった感じでしょうか。真面目に楽しむことができる仲間と、端々でフォローしてくださる先生のおかげで、挫けることなく発表を全うすることが出来ました。

後期の内容は主にゼミ論に関するものでした。最初は山のような資料に面食らったのですが、書き方に関する演習問題を解き、先輩達のゼミ論文などを見ているうちに、このようなものが自分で書けるようになったらさぞ誇らしいだろうなど、鼓舞されるような気持ちになりました。来るたびに意欲がわいて来る、不思議な魅力があるゼミだと思います。

ここまで教室の中でのゼミを紹介してきてしまいましたが、“All work and no play makes Jack a dull boy” (勉強ばかりして遊ばないと鈍い人間になる) といった諺にもあるように、飲み会や勝浦のゼミ合宿など、気を張らずに楽しめる機会もたくさんあります。

「楽しみつつ学ぶ」という姿勢を大事に、ぜひ原先生のゼミに参加してみてください。

## この1年を振り返って

### 4年 松崎 鷹森

2017年度の原ゼミは、今年度より新設された図書館 2F「ラーニング・コモンズ」の和室スペースにて活動を行いました。ラーニング・コモンズでノート・パソコンを借り活動することによって、資料の文献探し、データ分析、そして論文の執筆をスムーズに進めることができ、各々の作業にとっても集中できました。何回も調査票を練り直し、皆からフィードバックをもらい、データ分析もお互いに身につけたノウハウを共有しながら進めることができました。翻訳をもとにした内容分析を行ったメンバーは、作品を丹念に読み込み、カテゴリー化をコツコツと進めていきました。適宜、進捗状況を報告し合ったのも、よい刺激になりました。

一年の中で最も大変だった事は、四年生の宿命とも言える「就職活動との両立」でした。

私たちのゼミでは、大半のメンバーは就職活動をしながら卒業レポートの製作を行っていました。就職活動の進捗にはそれぞれ差がありましたが、この月曜4限の時には皆で協力をし、それぞれを助け合って来ました。指導教員である原先生が、私たちが両立しやすいように、細かく時期ごとのノルマを段階的に設定して下さり、90分の中で各々が書き上げた箇所に対して丁寧にフィードバックをして下さったお陰で、無事に就職活動と論文製作との両立をすることができました。最後の集中力により、これまで感じ得なかった自己の限界を超えることができました。

私たちは学生が6人と非常にコンパクトな形で活動を行ってきましたが、先生が一人一人の指導に十分な時間をあてて下さいました。そして何よりも、先生とだけでなく学生同士もお互いにしっかりと向き合ってきたことにより、私たちの専門分野である「コミュニケーション」を積極的に図ることができた事が、この一年間の活動を充実したものにしてくれた最大の要因であると感じています。改めてこのゼミで活動をしてきて良かったと実感できました。





## 松井順子ゼミ

*Class of 2019*



Yoshiyuki: I love Ms Junko! It was a very enjoyable lesson! I want to take classes even after graduation.

Ayumi: 将来に役立つ事が学べる。

Mizuki: Matsui's seminar is intellectual and fun. So we feel very good about it.

Miki: 英語を話すことや聞くこと、日本語を英語に直したり、自分の考えを英語で伝えたり、力がつきます。

Naoki: 上達を感じました。通訳志望なので、がんばっています。

Kaoru: We've been able to enjoy talking with other members of the class! And we can improve our interpreting skills.

Sae: 先生はとてもやさしい。The teacher is very kind ☺

Moe: 😊

Aki: グループワークを主体とした同時翻訳の実習をしています。そのため、ゼミの皆と簡単に仲良くなれます。最終課題はプレゼンです。とても勉強になります。

Yuka: This seminar is very interesting!! 英語を上達させることができます!

Shun: 😊

Soshi: 通訳のトレーニングができて、とても英語力を上げることができました。また、プレゼンテーションでは、科学的なことなど、個人が好きな内容を発表できるため、様々なおもしろい情報を知ることができました。

(In order of year and Japanese alphabet 学年・あいうえお順)

## *Class of 2018*



Yuuri: Very nice studies and interesting, Asami: Had a good time. I love Junko. Moha, Naoya: Very very very..., Reo: Interesting and got good information such as speech contest and job hunting information, Yu, Fuya: Matsui semi is good! I was helped out by Ms Matsui and my friends, Yoshiyuki: Very, very interesting!! Kento: Matsui sensei gave us a lot of opportunities to learn English, such as the Interpreting Internship, the contest, the English Hato bus tour etc..., Kazuya: Before I took the Junko zemi, I was really worried about improving my English, but it was perfect → I was very satisfied with it, Seiya: Fun and difficult, Yusuke: I improved my English skills in Matsui seminar, and Matsui is a kind person. (In order of Japanese alphabet あいうえお順)



---

## 海外英語研修 CQU（オーストラリア）

---

この英語研修は 2017 年 2 月から 3 月に行われたものです。  
各学生の学年は 2017 年度のものになっています。



### 経験を活かすことができたオーストラリアでの生活

4 年 大野 浩輝

私はオーストラリアのシドニーにあるシーキューユニバーシティに 2 月 10 日から 3 月 10 日の一ヶ月間、語学研修に行ってきました。二年生の夏にアメリカの UCLA に語学研修に行った際に感じた経験や学んだ成果をさらに今回の研修で活かすため、今回の CQU 海外研修への参加を決意しました。オーストラリアでは、アメリカでは得られなかったさまざまな経験を得たと同時に、とても充実した生活を送ることができました。日々の授業はもちろんのこと、アクティビティやホームステイでの生活すべてが学びの場であったように感じます。

クラスは明海の学生に加えてモンゴル、日本からの留学生で構成され、オリジナルのテキストに沿って授業が展開されました。授業の内容はオーストラリアの地理やアボリジニの文化、動物や食べ物を扱ったものや著名人、環境問題を取り扱ったもの、そして comparative, superlative, articles, pronunciation などの文法事項を扱ったものでした。ペアワークやグループワークが主体で、積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢

や、英語を用いて意思や考えを述べようとする姿勢が求められました。それらはすべて、この研修の最終的な課題として課せられていたプレゼンテーションの発表に直結していました。そのため授業の際に間違ふことを恐れず積極的に先生やクラスメイトとやり取りすることを心がけて授業に臨みました。そういった意識づけをすることで、英語でコミュニケーションをとることをためらうことなく自然と英語が口から出るようになっていきました。そしてプレゼンテーション本番では納得のいく発表をすることができました。この経験や達成感は日本ではなかなか味わうことのできない貴重な体験だと思いました。自分の英語力がどの程度通用するのかを知ることができてよかったです。そして、これからもさらに勉強が必要だと痛感するととてもいい機会でした。

アクティビティでは Opera House や Blue Mountains, Bondi Beach など、シドニーの有名な観光地を訪れ、ガイドの方と一緒に The Mint, The Art of Gallery, Barangaroo, Allianz Stadium などに行きました。ガイドの方の説明や施設内に展示されている写真と資料からオーストラリアのさまざまな歴史を知ることができました。

ホームステイでの生活もとても素晴らしく、貴重な時間でした。初日は緊張と期待が入り混じったような複雑な心境でしたが、ホストファミリーは温かく親切に迎えてくれました。英語でコミュニケーションをとるのが難しく、どう伝えればよいか困った場面がいくつもありましたが、あきらめずに英語を使って説明することができました。

今回の研修を通して得たさまざまな経験をこれからの学生生活や将来に活かすことはもちろん、海外研修の良さや素晴らしさを多くの人に発信できたらいいなと思っています。

## 現地での生活

### 4年 小関 聖翔

この CQU の海外研修に参加し、非常に貴重な経験と共に、楽しい生活を送ることができました。私にとっては初めての海外ということで緊張や不安もありました。もちろん楽しみでもありましたが、食生活など気になる点が多くあり、行く前は不安の気持ちの方が大きかったです。しかし、実際に行ってみると不安や緊張などといった気持ちはなくなりました。一番心配していたのは食生活なのですが、私が過ごしたホームステイ先ではチャーハンなどを夜ご飯として作っていただいたため、特に不自由することなく過ごすことができました。また洗濯は1週間に1回だけしか行わない、シャワーは1人10分から15分程度と研修前の説明会などで聞いていましたが、私のホームステイ先では1週間に2回洗濯をしてもらい、シャワーも好きな時に浴びることができ時間に制限もありませんでした。もちろんホームステイ先にもよるのでその点に関しては良かったと思っています。

次に不安だったのは「授業」です。日本で授業を受けるときはもちろん日本語を使って説明などを行うので、理解が容易にできます。しかし、オーストラリアの大学は説明ももちろん英語です。私は説明が理解できなかつたらどうしよう、授業についていけなかつたらどうなるのだろう、などといった不安がありました。おそらく他の学生も多少なりとも授業についての不安はあったと私は思っています。し



かし、CQUの授業は非常に楽しく受けることができ、担当の先生もわかりやすい単語を使いながら説明をしてくれるので理解することができました。難しい単語なども簡単な単語や軽いジェスチャーや絵を用いながら説明をしてくれるため非常にわかりやすかったです。

この研修中に自分の中でもっと学んだ方がいいなと思ったことは「日本の文化」についてです。クラスメイトのモンゴル人の方やスタディ・パディのセルビア人の方は、やはり日本の文化について興味を持っていたため文化について聞かれました。しかし、私はうまく説明をすることができませんでした。単語や文法がわからないというわけではなく、ただ単純に「自国の文化」について良く知らなかつたため伝えることができませんでした。その時に自分の国のことをよく知らないのって残念だなと感じました。このことをきっかけに自国の文化を知ろうと思いました。

大きなアクシデントもなく無事に過ごすことができ非常に良い研修となりました。またいつか機会があれば、オーストラリアだけでなく他の国にも行きたいという気持ちがこの研修を通して芽生えました。

## CQU 研修を終えて

3年 大嶋 健仁

私は、大学のオーストラリア研修に参加し、一ヶ月間オーストラリアの大学であるシーキューンシティに通い、英語やオーストラリアのことについて学んできました。シドニーでホームステイをし、ホストファミリーの方と過ごしました。この研修の中で、大学の他にもシドニーのさまざまなところに行くことができ、とても貴重な経験になりました。私は、英語を海外でも学び、さらに積極性も身につけたいと思い、研修に参加しました。

大学では、英語を楽しみながら学ぶことができました。グループワーク、ペアワークを

中心としたコミュニケーションを軸にして行うものが多く、授業やホームステイでの生活を通して、コミュニケーション能力や積極性を向上させることができました。最初は、ホームステイ先、大学での授業と、不安なことだらけで、研修先でみんなと楽しくやっていたのかと不安でした。ホームステイ先でも、自分の気持ちや言いたいことをうまく伝えることができず、少ししか話せませんでした。しかし、ホストファミリーの方はとても忙しく、夜にしか会えない方もいたのですが、とても優しく積極的に話しかけてくれました。また、英語の練習になるようにと会話練習もつきあってくれました。そうしていくうちに、ホストファミリーの方のおかげもあり、後半は楽しく会話することができるようになっていました。授業の中でも、大学の生徒と接することができ、たくさん会話ができることができ、言葉が通じたことで自信にもつながりました。

研修中、オーストラリアの文化や人々についても多くのことを学びました。驚いたのは、水不足の国であり、シャワーなどは短時間で済ませる必要があることや、シティで売っている水が高いことです。水が日本円で約 500 円しているところを見つけたときはとても驚きました。また、オーストラリアの人たちはすごく親切な人たちでした。迷っていた時や、いつも使っていたバス停が閉鎖されていて帰り方がわからなくなってしまった時など、色々な人に道を訪ねたら、すぐに答えてくれたり、ほかの人に聞いてくれたりと、優しい人たちがとても多くて感動しました。

私は、研修中に学んだことを忘れないように、積極的に英語を使い、文化についてもさまざまなことを学んで行こうと思いました。ESS に通い、その中で積極的に話しかけていくことで研修で鍛えたコミュニケーション能力や積極性を維持していこうと思いました。

## 語学研修で学んだこと

### 3年 坂入 可奈子

2月10日から3月10日の1ヶ月間、オーストラリアのシドニーにあるCQUへ語学研修に行ってきました。今回の研修は、私にとって2回目の語学研修であり、初めてのホームステイ体験でした。日本と真逆の気候で、生活に慣れるのには時間がかかりましたが、毎日が充実していました。1ヶ月は長いと感じていましたが、あっという間に帰国していました。

CQUでの授業は、午前と午後の2時間制でした。授業内容は配布された冊子をもとに進んでいき、主にディスカッションやリスニングの練習で、ライティングなどはあまりありませんでした。ゲームやクイズ形式で授業が進んだり、工夫がされていて楽しく学ぶことができました。授業では、オーストラリアの歴史や動物などについて学びました。授業内容で特に面白かったのは、グループに分かれてドリーミング・ストーリーを読み、劇で

内容を伝えるという授業でした。ストーリーで使われている難しい英語を簡単な英語に変えるのは少し難しい部分もありましたが、相手を考えながら行う作業は意思疎通をうまく行ううえで重要なことなので、ためになる練習になりました。クラスには、現地の学生も参加して一緒に授業を受けることができ刺激になりました。ペアワークで一緒になった時は緊張しましたが、優しく話しかけてくれるので話が弾んで、リラックスして話すことができました。全てスムーズに会話が進んだわけではなく、伝わらずに悔しいと思うこともありましたが、諦めずに会話をすることで間違えることへの恐怖感が無くなりました。

ホームステイは、私が想像していたものとは少し違いました。ホストファミリーとは別で食事をとっていたため、話す機会はあまりありませんでしたが、とても優しいホストマザーで、誕生日にケーキを用意してお祝いしてくれたり、いつも美味しいご飯を作ってくれました。デンマークから来た留学生も同じホームステイ先で、ご飯の後に部屋で雑談したり一緒に駅まで行ったりと、家でも英語を話せる機会が増えて、素晴らしいホームステイ体験になりました。

今回の研修では、前回の研修での失敗からで学んだ、アウトプットに挑戦することができました。考えていた文章とは違うことを口走ってしまったとしても、ちゃんと伝えたいことは相手に伝わるという事がわかりました。研修を通して、自分に自信をつけることが出来ました。とても充実した1ヶ月を過ごすことができました。



## オーストラリア研修

3年 高尾 亮太

2017年の2月から3月にかけて約1ヶ月間オーストラリアのセントラルクイーンズランド大学にて英語を学び、更に局所的ではありますが、オーストラリアの文化を生活の中

で経験しました。

私が本研修に参加した主な理由は2つあります。第一に、海外という孤立した環境に身を置くことで自らの自立心を育成して一人で生きていく力を養おうと思ったからです。第二に、英語を用いた会話をすることで語学力とコミュニケーション能力を伸ばすことが出来ると思ったからです。当たり前ですが、研修先では親がいません。ホームステイファミリーに助力を頼まない限りすべてのことを一人でやらなければならないので、自立心を鍛える絶好の機会だと思いました。またホームステイ先や大学で順風満帆な生活を送るためには英語を使って積極的に会話をする必要があるので、自然と英語が上達すると思いました。



研修に行くことが決まった後、多くの事前学習や課題提出を行いました。初めはやる必要などないと思っていたのですが、現地の方との会話をする時に非常に活用することが出来ました。オーストラリア人は肉料理が好きなので、肉料理についてとても盛り上がりました。

研修先に持って行って一番良かった物はホームステイ先のお土産です。必要はなかったのですが、1ヵ月間お世話になるので持っていくととても喜ばれて仲良くなるきっかけ作りになりました。ホームステイ先の方は、特に富士山や刀のストラップやマグネットなど、日本を象徴する物が好きでした。

研修内容としては、授業は基本的に週に5日あり、放課後や土曜日にビーチや動物園などの観光名所を見学し、日曜日が休日となっていました。授業はペアワーク・グループワークが中心で他の研修生達と英語のみの会話や課題への取り組み等がありました。授業内容で特に印象的だった内容は発音練習です。英語の早口言葉を三回繰り返して、誰が一番早かったか競い合いました。ゲーム感覚で楽しく学びましたが、日本人が間違えやすい「R」と「L」の発音の違いや音の弱化がしっかりと理解できる授業でした。先生方も優しい方ばかりで、課題などで分からないところがあると、丁寧に説明してくれました。観光名所巡りではビーチと動物園以外にもシドニータワー、水族館、オペラハウス見学に加え、更にサイクリングツアーもありシドニー内の観光名所ほぼ全てを回りました。

海外研修には実際に行った者にしか分からない魅力があります。機会があれば是非積極的に参加して欲しいです。



今回このような素晴らしい機会を与えてくださった明海大学並びにセントラルクイーンズランド大学には感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。

## ホームステイ生活

3年 新鞍 美奈

私がこの1ヶ月間のオーストラリアへの留学で1番印象に残っているのは、ホームステイをしたことです。前回留学した時は寮だったので、ホームステイは今回が初めてでした。私はずっとどんな家庭なのだろう、どんな人なのだろうなど、不安がたくさんありました。出発する何日か前にホームステイ先の情報が届き、子どもがいることを知り、不安はありましたが、子どもが大好きなのでとても楽しみになりました。当日、ホームステイ先に到着したときホストマザーと一緒に男の子がお出迎えしてくれてとてもかわいかったです。ずっと緊張していましたが、家に入ったら娘さんが話しかけてくれて緊張がほぐれました。折り紙を持って行って鶴を作ったら喜んでくれたり、ホームステイ先にピアノがあって弾いたらほめてくれたりとても嬉しかったです。ご飯は、朝はシリアルやパンでした。夜はパスタ、ステーキ、ポテト、ラザニアなどホストマザーが作るご飯は全部美味しかったです。洗濯は、洗濯機を自分で回して次の日学校から帰ってきたら、ホストマザーがきれいに畳んで部屋においといてくれていて本当に嬉しかったです。たまに男の子が友達を連れてきてはしゃいで遊んでいる姿や、お姉さんが弟にピアノを教えている姿を見てとても癒されました。最後お別れをするときにみんながハグしてくれて本当に終わりなのだと思います。私にとってこのホームステイ生活は、毎日ホストマザーがおいしいご飯を作ってくれ

たり、みんなが私のことを気にかけてくれたり、ホストファミリーと一緒にごはんを食べたり、お話したり、全部が楽しくて充実したものでした。ホームステイをすることはとても不安でしたが、ホストファミリーがみんな良い方だったし、オーストラリアの文化に触れることができ、とても良い経験になりました。



私はこの留学に参加して、とても充実した生活を送ることができました。最初はみんなと仲良くできるのかなと思っていましたが、授業やアクティビティで一緒に過ごしていくうちに仲良くなることができました。学校が終わった後に遊んだり、ご飯を食べ行ったり、休日出かけたりみんなと過ごす時間は笑顔が絶えずとても楽しかったです。授業では、最後にプレゼンテーションをやりました。私は人前で話すのがすごく苦手で嫌いなのですが、緊張したけど協力して頑張り成功できたので、前よりは苦手ではなくなったかなと思います。この海外研修での生活は一生忘れられないような良い思い出になりました。この1カ月間で学んだことを忘れず無駄にしないようにこれからの生活に活かしていきたいです。

## ホームステイで感じたこと

3年 松山 桃子

私は、今回の研修で学んだことがたくさんあるので、ホームステイに重点を置いて書きたいと思います。ホームステイは私にとって人生で初めてだったのでとても緊張しました。私のホストファミリーは、退職しているおじいちゃんとおばちゃんでした。そのお二人は私たちのような留学生をよく受け入れているようで、留学生に対する対応が慣れている感じで、緊張している私にとってはとても安心感がありました。しかし、マザーの英語は訛りがとても強くて何を言っているのかほとんど理解できませんでした。それを、同じ家でホームステイしていた中国人留学生に英語で通訳してもらおうという状況でした。そういっ



た部分では不安がありました。そして案内されたお部屋は、ベッド2つに二段ベッドが一つ、シャワー、トイレ、シンク、コンロ、冷蔵庫、洗濯機、テーブル、椅子、クローゼット、全てが揃ったお部屋でした。研修前に言われていたシャワーの時間や洗濯の回数などの注意も一切なく、最後まで快適に過ごすことができました。

朝食は各自で自由に、食パンや卵、コーンフレークを使って取りました。夕食はホストマザーが毎日作ってくれました。

大体19時が夕食の時間です。しかし研修が始まって一週間目のある日、帰る時間が遅くなり、連絡もできずに、家に夕食があるのかどうか不安で帰った日がありました。リビングに行ってみると、やはり準備されている形跡はありませんでした。そして、どうしようか迷いながら自分たちの部屋に戻ると、なんとテーブルに夕食が置いてあったのです。しかも、日本米で作られた太巻きでした。初めてのことだったので、とても嬉しくなりました。

それ以降、生活リズムも安定し帰る時間も安定してくると、部屋に夕食が置いてあるというスタイルになってきました。しかしそれでは、ホストファミリーや中国人留学生とコミュニケーションが取れないと思い、なるべく早く帰るように心がけました。

また、オーストラリアはお店が閉まる時間が早いのですが、木曜日は遅くまで開いている日です。ある木曜日、マザーに大きなショッピングモールに連れて行ってもらいました。その頃にはもう、マザーの英語を最初の頃より聞き取れるようになっていて、ガールズトークをしたりして、たくさん話しました。そのショッピングモールは大きすぎて、とても1日で回り切れなかったのが、後日中国人留学生と一緒にまた行ったりもしました。その中国人こそ、マザーの英語を英語で通訳してくれた人です。マザーと彼女のおかげでホームステイを楽しむことができたので、ふたりには感謝の気持ちでいっぱいです。

ホストファミリーや中国人留学生との生活は、とても楽しく、充実していました。日本では普通の事でも、その全てが新鮮で、一つ一つが勉強でした。ホームステイの素晴らしさを知ることができ、またしてみたいと思いました。

## オーストラリアに留学して

2年 坂本 風花

私はオーストラリアで、英語はもちろんさまざまなことを学びました。海外には旅行で数日しか行ったことがなく、留学も、ホームステイも、1か月という長い期間日本から離れることも、何もかもが初めての体験でした。

オーストラリアで私がまず始めに驚いたことは外国人の多さです。オーストラリアは移民を多く受け入れている国ですが、私の予想以上に他国の人々がたくさんいました。どこに行っても聞こえてくるのは英語だけではないのです。また、「オーストラリアの英語は訛りがあるから聞き取りにくい」とよく聞く話を肌で感じました。私が暮らしたホームステイ先の家族もギリシャ人だったので、発音が違うことに悩まされ、かなり苦労しました。しかし、めげずに毎日積極的に話しかけることで、マザーも親切に分かりやすい英語を使ってくれました。そういった前向きな気持ちは必ず相手に伝わることを学びました。

毎日9時から始まる授業にバスや電車を使って向かうことも初めは大変でした。駅には着けたものの、学校の場所が分からず迷うこともありました。学校に着いてからも耳にするのはすべて英語で、授業についていけるだろうかという不安がありました。しかし現地の先生方の英語はとても聞き取りやすく、分かりやすく、日が経つにつれて耳も慣れていきました。私が一番ためになったのは、ある単語を簡単な英語で訳すという、英英辞典のようなことが授業で取り入れられていたことです。私は今まで、分からない単語があったら和英辞典で調べるのが当たり前だったので、英英辞典の重要性を知ることができました。それから、アクティビティに出かけるときは積極的に先生に話しかけるように心がけまし

た。自分の英語に自信はなかったけれど、先生は分かりやすい英語を使ってくれたのでコミュニケーションを自然にとれるようになりました。

毎日の授業で成長する自分を実感し、アクティビティではさまざまな観光地、行きたかった場所に行けて、毎日が充実していましたが、当然つらいこともたくさんありました。留学経験がすでにある先輩たちや自分よりも英語ができる同級生を見て、自分は劣っていると感じたり、自分の伝えたいことが英語で出てこなくて、やるせない気持ちに何度もなりました。留学をして一番痛感したのは何よりも自分のスピーキング力の無さです。知っている単語はたくさんあるはずなのに出不来なのは、普段英語を使って話す機会がないからだと思いました。会話は慣れだと思えます。今後また留学をしたいと思っているので、その時には今回の反省を活かせるように、大学にいるネイティブの先生方ともっと積極的に話すなどの対策をしていきたいと思っています。

今回の留学は私にとって何にも変えることができない人生の宝物になりました。この経験を無駄にしないで今後も頑張ります。



## 研修に行って気づいたこと

2年 住吉 咲紀

この留学に参加してみて私は、伝えようとする事の大切さと、まだまだ自分は勉強不足だったことに気づきました。私はこの留学に行く前は、文法がしっかりしていなければ英語は通じない、どうせ私の英語じゃ会話にならない、と決めつけてしまい、伝えることを諦めていました。こんな自分を変えたいと思い、今回の留学に参加してみようと思いました。初めはホームステイ先の家族に受け入れてもらえるか、1ヶ月間学校でやっていける

だろうかと不安でいっぱいでしたが、ホストファミリーはとても暖かく迎え入れてくれ、学校の先生方はとても素敵な笑顔で話しかけてくれて、その瞬間に不安は一気に減りました。しかし、最初の1週間は相手が何を言っているのか聞き取れず、自分の気持ちを英語で伝えることもできず、なかなか言葉が出てこないまま黙り込んでしまうということが多く、周りではできているのに自分はできていないという不安と焦りで、今すぐ日本へ帰りたいたいと思ってしまいました。しかし、来てまだ1週間しか経っていませんでしたので、諦めないで自分のペースで少しずつ前へ進んで行こうと気持ちを切り替えました。

悪戦苦闘する日々が続きましたが、ある日、いろいろな国の人達が一箇所に集められ会話をすることができました。会話をしてみると、そこでも全く聞き取れなかったり、自分の英語が伝わらなかったりとまた自信をなくしそうになりましたが、相手は母国語が英語ではない人達であって、彼らが自分が伝えたいことを伝えようと頑張っている姿をみて、私は、間違えることを恐れてはいけなく、伝えようとしなければ何も始まらないということに気づきました。だから私も自信を持って発言をしようと思えました。単語だけでかなり拙い英語でしたが伝えようとすると、ホストマザーや先生方はしっかり私の目を見て話を聞いて理解してくれようとしてくれたのでとても嬉しかったです。それが自分の中で少しだけ自信につながりました。

1ヶ月で自分の頭の中で描いている自分が変わるのは無理な話でしたが、変われるという自信にはつながりました。しかし、単語だけで伝えようと思っても、時と場合によっては文法が大事であり単語だけでは伝わらないときがもちろんあり、無知な自分に腹を立てたことも何度もあり、自分の勉強不足に気づきました。この1ヶ月間で、自分はもっともっと勉強をしなければいけないことと、伝えることの大切さに気づき、自分への自信に繋がることもでき、とても意味のある留学になったと思えました。日本に帰っても英語で会話をすることを恐れずに、この先、自分がもっと成長していけるように努力し続けていきます。



## オーストラリアで学んだこと、今後に活かしたいこと

2年 宮内 夕希

今回のオーストラリアでの海外派遣研修を通して学んだことは、自分から伝えたいことを発信していかないと相手には伝わらないということです。ホームステイ先で、ホストファミリーに「何かしてほしいことある？」と言われ、単語がどうしても浮かんでこなくて黙り込んでしまうということが数回ありました。日常会話でも、“How was your day today?”と聞かれ、普段日本では「おかえり」と「ただいま」の二言で会話が終わっているので、ホストファミリーにそう聞かれたときは、頭にはてなマークばかり浮かんでいました。その後から、その言葉は日本の挨拶のようなもので、海外ではそこから会話を広げたり、話題を出して仲良くなっていくのだなと思いました。なので、それからは、ホストファミリーにそう聞かれたら、今日のできごとを話したり、今日の夜ご飯の話をしたり、自分からどんどん話しかけるようになりました。するとホストファミリーの方も、自分のことを話してくれたり、子供たちのことについて話してくれたりとても仲良くなることができました。ただ、いまだに海外の人がときどき会話に入れてくるジョークに、“It's a joke!”と言われるまで気づかないので、ジョークにも気づいて会話の波に乗れるようになりたいなと思いました。

また、今回のオーストラリア研修で変わったことは、自分が以前より授業に積極的になったと思うことです。日本にいたときは、「間違えたらどうしよう」という不安があり、解答がわかっても黙り込んでしまうときがよくありましたが、オーストラリアの大学で授業を受けてみて、間違えてもいいからどんどん自分から発言してみようという勇気が出るようになりました。そのようなことから、自分に自信をつけて、英語が以前よりもっと好きになれるように頑張りたいと思います。今回の海外研修では、明海大学の生徒みんなと同じ授業を受けたので



すが、先生がとても優しく、ちょっとした疑問や問題に悩んでいることがあっても、いつでも質問ができ、しっかりとその質問に答えてくれるのでとてもスムーズに授業内容を理解することができました。また、みんなが発言できるような雰囲気であり、和気あいあいと授業が進んでいったので、授業がとても早く感じました。日本に帰っても、オースト

ラリア研修で受けた授業のように、自分から何事にも積極的に取り組んでいけたらいいなと思いました。1ヶ月間、本当に充実していて、内容がとても濃い研修となりました。

## 留学でわたしが得たこと

2年 山田 実紀

留学に行く前の私はとにかくおとなしく、積極的に何かをするタイプではありませんでした。授業での発表などでも進んで自分から、ということはまずありませんでした。そんな自分を変えたくてオーストラリア留学に行きました。今まで、海外に行ったことも留学をしたこともなかった私には、全てが新しい経験でした。私が一番オーストラリアっていい国だなと感じたのは、人びとがフレンドリーでとにかく優しいところでした。お店の店員もこまめに話しかけてくれたり、相談に乗ってくれたりしました。英語を使い慣れていない私はお店などでなかなか上手に会話することができませんでしたが、現地の方々はそのを察してわかりやすく話してくれたり簡単な単語を使ってくれたりしました。そして私はある日、酔っ払いが若い人に話しかけているのを電車で目撃しました。日本だったら絶対無視して関わらないようにするところをその若い人は話をしてあげて、さらに酔っ払いの乗り換えも調べてあげていたのです。その時に私は「オーストラリアには素敵な人がたくさんいるのだな」と感じました。

そして私が一番成長できたと思ったのは、授業で誰が最初に発表するかという状況になった時に自分から「私やります！」と手を上げられるようになったことです。授業が始まって何日かはやはり自分から手を挙げるのに抵抗あったのですが、変わりたい思いが強くて積極的になることができました。クラスはほとんどが明海生だったので英語が上達したかと言われると正直わからないけれど、自分の内面的にはとても成長したのでほんとうに行ってよかったと思いました。

最後はアクティビティ。毎日授業を終えた後にミュージアムやビーチなどたくさん場所に行って楽しみながら勉強もしてきました。毎日「今日はどこに行くのだろう」というワクワク感があってとても良かったです。楽しみつつもオーストラリアについて学べるのはとても良いと思いました。

今回のオーストラリア留学で、日本では経験することができないたくさんのことが出来て全てにおいて成長できたと思います。日曜日しかフリーの日がないくらい毎日予定がぎっしりだったけど、そのおかげでとても充実した濃い毎日が送れたのではないかと思います。もし留学に興味があったら、大学生のうちに一度は経験しておくべきだと思います。留学を経験すると他の国との違いに気づき、日本の快適さを実感できるのではないかと思います。

## 海外英語研修 UCLA（アメリカ）

### 楽しくもあり、大変でもあった研修

3年 大山 真美

#### ・生活に関して

今回の研修では、寮で生活を送りました。私は人生で初めて、寮生活を送りました。私の部屋は3人部屋で、同じ明海大学のメンバーでした。部屋の中は2段ベッドが二つ部屋の両脇にあり、内一つは、下の部分にベッドではなく、衣装ダンスと勉強机が設置されています。部屋の一番奥に勉強机が両端に設置してありました。部屋に入ってからすぐの両端に小さいクローゼットが配置されています。私はクローゼットを使うことはしませんでした。他の部屋では使っている人も多くいました。

洗濯物に関して言えば、最初はランドリーの使い方が分からず、洗濯物を持ったままうろついてしまいました。使い方というのは、料金がかかるはずなのに、お金を入れる場所が見当たらず、それらしいところを探し回っていたのです。正解は、寮のATM横にある機械で、プリペイドカードを購入して、それを使ってランドリールームのタッチパネルを操作し、洗濯機を動かすのでした。

食事は寮の近くのダイニングで取りました。選択肢として2つのダイニングがあり、自分たちの好きな方で食事をしました。どちらもメニューは似たようなもので、特に変わりはないです。細かいところで、設置してある飲み物のバリエーションの違いや、同じピザでも生地が違い、比べながら食事をとることが楽しかったです。

朝、朝食に向かい、そのまま教室に向かっていました。寮からダイニングまで向かうと



きに、毎朝、野生のリスを見ることが出来ました人に大分慣れている様子でそれなりに近づいても逃げることがなかったです。ですが、触ることは出来ませんでした。野生なので、触ることはオススメしません。

食べ物を探し回っているようで、ゴミ箱の近くにいるのをよく見かけました。綺麗なリス



とは言えないです。見かけても、遠くからリスがいる、可愛いなど思っているくらいが丁度良いと思いました。

#### ・学校での授業について

どのクラスも日本から来ている学生が多かったです。私のクラスには他に、台湾、韓国、中国、イスラエルから来ている人がいました。皆個性的な人たちが多くて楽しかったです。当然、英語で会話をするのですが、母国語のなまりがあり、聞き取りにくいことが多々ありました。こういう状況もこういう研修ならではの経験なので楽しかったです。日本人には分からない日本語のなまりというのか、和製英語と言ったら良いのか、どう表現すればいいのかわかりませんが、他の国の話者からすれば、独特のものがあったのではないだろうかと考えています。

授業では、午前中の授業は火曜日、木曜日に Culture クラス、水曜日、金曜日で Academic クラス、午後の授業は校舎を変えて、Discover L.A.の授業でした。校舎を変える人はごく一部で、全員が校舎移動というわけではなかったです。歩いて 10 分ほどの場所でお昼の時間が削られることに最初は憤りを感じることもありました。授業の内容はどれも楽しかったことの方が多く、この小さな憤りもすぐに消えていきました。

#### ・感想

ここに書ききれないくらい他にももっとたくさんの出来事がありました。休みの日や、バスに乗ったときの珍事、怖い思いをしたことなど、とてもとという表現では足りないくらいの濃密な 3 週間を過ごしました。無事に帰国した今は、思い出になってしまったことが寂しいです。

## いろいろな発見があった UCLA 研修

### 3 年 澤 春花

私は 2017 年 8 月 27 日から 9 月 17 日の間、アメリカの UCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) での研修に参加しました。UCLA では、主に会話を中心とする授業を受けました。私のクラスには日本の学生が結構いましたが、外国の学生も何人かいて、私はその学生たちからいつも刺激を受けていました。例えば、勉強熱心な台湾の学生がいたのですが、その学生は、私が見る限りでは日本の学生よりも積極的に発言していて、英語をよく使いこなしているように見えました。しかし、授業中に頻繁に英単語の意味や文法をメモしていて、完璧に英語の知識がある訳ではないのかなと思いました。私は英単語や



文法の知識は多い方だと思うけれど、その学生とは逆で会話においては消極的です。そのことに気づき、英語で話す時はもちろん知識も必要だけれど、その台湾の学生のように英語を学ぼうという積極性を持つことが大切だと気づきました。また、これは日本でもよく言われることですが、やはり知識を吸収し、自分の言葉としてアウトプットをしていくことが英語をうまく話せるようになるために効果的な方法なのだと実感しました。

放課後や休日には、友達とディズニーランドやユニバーサルスタジオ、ハリウッドなどいろんな場所に行きました。外出時は主にバスを利用したのですが、バスは日本とは違う箇所がいくつかあって驚きました。例えば、バスの他の乗客に話しかけられたことが特に印象に残りました。私が明海大の友達とバスに乗っていると、「君たちは日本人？」と聞いてきて、知っている日本語や日本の地名を話してくれた男性がいました。この時以外にも街中やバスで話しかけられることはありましたが、長く会話をした人は他にいませんでした。日本ではバスの乗車時に他の乗客に話しかけられることは滅多にないので、新鮮でした。また、乗車料金を払う時、お釣りが出ないことに驚きました。料金は1ドル75セントで、私は75セント分の硬貨を所持していないために、2ドル(1ドル札2枚)で料金を払



っていて、その度に25セントのお釣りが出ないので悔しい思いをしました。その他にも、バスに乗車する度に新しいことに遭遇して、日本のバスとの違い及び文化の違いを実感することができました。

私は海外に行くのが初めてだったということもあり、この研修に参加することには少し不安がありました。実際、初めての経験に戸惑うことも多々あって、研修中は不安を抱えていました。ですが、UCLAの優しい先生方や親切な現地の人々、一緒に研修に行った明海大生など多くの人に支えられて、楽しく良い経験も沢山させて戴きました。

最後に、この研修が円滑に行えるように準備を進めてくださった留学支援課の方々、引率の先生方、並びにこの研修に携わってくださった全ての方々、ありがとうございました。

## 未経験の地

3年 金尾 貴希

私は、夏休みの3週間アメリカ、ロサンゼルス(UCLA)へ奨学海外研修へ行ってきました。奨学生といえども私の英語レベルは、決して高いものではありませんでした。自分の英語が現地の人たちへどれほど通用するのか不安もありましたが、日本と変わった生活をするのに大きな期待を持っていました。

飛行機から降りた瞬間、空気、温度など文字通り、肌で感じるほど日本と違う感覚がしました。季節は日本と同じ季節の夏でしたが湿度が全く違います。日本は湿度が高いのに対し、ロサンゼルスは湿度が低いので、現地の気温が高くとも日陰に行けばとても心地よいです。また、雰囲気も日本とは全く異なります。ロサンゼルスは土地が大きく広いので、高い建物が少なく簡素な町並みが見られます。また、ロサンゼルスは日本以上に車社会ですので、交通量がとても多いです。

私たちはUCLAの寮に住み、そこから徒歩で30分弱ほど離れた校舎へ授業を受けていました。UCLAはその大学が一つの街かであるようにとても大きな大学です。大学には本当に多くの人種の方がいます。寮での生活は、3人での相部屋でした。また、シャワー室がフロアで共同でした。ロサンゼルスは降雨の少ない地であるので、水は貴重なものです。ですので、シャワーの勢いは、日本と比べると弱いものでした。ご飯は寮のバイキングで食べていました。アメリカ人は肥満体質が多いということがわかるように、ジャンクな食べ物(ハンバーガーなど)が多いです。しかし、健康志向の人も多いようでオーガニックな食べ物や野菜もバイキングには数多くありました。しかし米類などの日本食はなく、とても恋しく思うこともありました。学校でのクラスは、日本人が多くいました。クラスのほとんどが日本人でしたので、日本語に頼ってしまうこともありそこはマイナスな点でありました。しかしもちろん、講師は現地の方ですので授業はすべて英語です。日本での生活では英語を使う機会がほとんどありませんが、現地ではすべてが英語ですので、その環境はとても新鮮なものであり、英語を使ってコミュニケーションを図るといことはとても楽しいものでした。先に述べたように、私の英語力は低いものでありますが、英語での授業は難しいものとは思いませんでした。話す文法はめちゃくちゃであっても、ジェスチャー、単語



で表すことで伝えたいことは容易に伝わります。とにかく、実際にコミュニケーションを図ることが大事だと思います。

今回私自身、留学は2回目のことでありました。留学は本当によいものです。海外の生活、雰囲気などなど日本とはまったく異なります。それらは文字で知ることはできますが、実際に感じることは現地に行かないとわかりません。海外の人と話すことは、非常に重要なことだと思います。彼らと話すことで、新しい考え、伝え方、感覚など知りえるものは多いです。これからも、新しいことに挑戦することを続けていきたいと思っています。

## A Fabulous Experience!

3年 中川原 寿人

私は2017年8月27日から9月17日までの間、アメリカのカリフォルニア州にあるUCLAという大学で研修を行いました。ここでは私が受けた授業とプライベートで体験した事や学んだ事を紹介していきたいと思っています。

まず、最初は授業で経験したことです。私は午前と午後にそれぞれ授業をとっていて、午前の授業では教科書やテレビ番組、映画などを活用して文法や単語を学び、それをグループやクラスで共有するという内容でした。午後の授業では、ロサンゼルスのような場所を訪れて、現地の方にインタビューをしたり、写真を撮ってそれを授業のホームページに掲載したりしました。しかし、初めの頃はうまくコミュニケーションがとれずどうしようか悩んでいました。しかし、先生方に間違えることは全く恥ずかしいことではなく、そこから学び取れることもあるので、どんどん間違えながらコミュニケーションをとりなさい



と言われました。そこで私は完璧な英語を話す必要はなく、伝えたい要点だけを伝えられればいいのだと気づきました。私は常に完璧な英語を話さなければいけないというプレッシャーを感じていたので、その言葉で肩の荷が下りた気がしました。

次にプライベートでの出来事についてですが、学校以上に驚いた経験をたくさんしました。私のイメージではアメリカの人は冷たいというかクールな印象が以前はありましたが、今では印象が変わりました。例えば、向こうではちょっとぶつかったりしても一言必ずかけてくれました。今では日本のほうが人とぶつかったりしても何も言わない人が多いという印象を受けます。バスに乗ったときには、初対面なのに気さくに話しかけてくれた人もいて、日本だったら他人とバスや電車で話すことはめったにないのでとても驚きました。また、目的地の場所で降りたときに、わざわざドライバーの人が目的地までの方向を教えてくださいましてとても親切だなと感じました。私はこの3週間の間に多くの場所を訪れ、日本とアメリカ(ロサンゼルス)との違いを痛感しました。特にハリウッドやベニスビーチではそれがよくわかります。日本とは違って本当に多種多様な人々がいて、それが普通の光景でした。日本では普通の人と少し違うだけで冷たい視線を浴びたり、何か言われたりすることがありますが、向こうではそのようなことは全くなく、反対にみんな自分の個性を前面に出して堂々と歩いていましたし、それをおかしいという人もいませんでした。そこで私は、まだ日本も平等とは言えないし、軽蔑や偏見もまだ色濃く残っているなと感じました。今後それらが少しでも受け入れられるようになったらいいなと感じます。私自身これからの人生でさらに多くの人との出会いを経験することだと思いますが、見た目などの先入観とらわれず一人ひとりを尊重しながら様々な人と関わっていきたいなと思いました。

## 私がカリフォルニアで得たもの

### 2年 小林 崇晃

私が今回研修に英語研修に向かったのは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、通称 UCL A と呼ばれる大学です。アメリカ西部に位置し、雨はほとんど降らず、一年中晴れている地域なので、とても住みやすいです。私たちは UCL A Extension と呼ばれる、UCL A が母体の語学学校に3週間通いました。そこには、アジアの国からきている方もいれば、欧米諸国から来ている方もいて、国際色が豊かな印象でした。

授業はレベル別に行われ、私がとっていた授業はディスカッションがメインのクラスと、アメリカのテレ



ビドラマを見てその番組についてのクイズや内容についてグループディスカッションするクラスが午前、英文法と発音を学ぶクラスが午後に隔曜日で行われました。日本の授業とここが違うと思ったところは、授業の半分以上がグループディスカッションに充てられているので、必然的に英語を使う機会が増え、会話力が付いてくるのが実感できました。私が授業中に意識していたのは、グループディスカッションの際に必ず自分が一番初めに発言をすることです。グループになるとどうしても、特に日本人同士の場合は、お互いが牽制しあって、結局時間が無駄に過ぎて行くことが多々ありますが、それをここで起こすのはもったいないと思い、積極的にグループを仕切り、メンバーに意見を聞いたり、発言を促したりと、思考錯誤しながらディスカッションを進めました。自分だけでなく、相手の意見を聞き出すことは、自分の意見を客観的に考えるのにとっても役立ちます。

授業外でもなるべく英語を使うことは心がけてがけていました。少し勇気はありますが、一人で買い物に行ってみたりカフェで注文してみたり、Google Mapのおかげで目的地がわかっているのにも関わらず、あえて道行く人に道案内をしてもらったりと、積極的に英語を話す努力をしました。この考えを持つようになったきっかけは、YouTuberのBilingirlのChikaさんの動画の一つにアメリカのマイクロソフトで働いてらっしゃる日本人の方が出ていたものがあり、その中でその方が、“英語が話せるようになりたいなら自分から話さ





ないといけない。すごく簡単で聞かなくてもわかるようなことでも、まずは英語を口から出してみる。”とおっしゃっていました。私はこれをカリフォルニアに行った時に実践しようと心がけてからカリフォルニアに向かうことができたので、とても有意義な3週間を過ごせました。私からこのジャーナルを読んでいる明海生にアドバイスを送るとしたら、しっかりとした目標を持ってから海外に出ることをお勧めします。何の目的もなくダラダラと現地で過ごすのはとてももったいないです。限られた時間なので、小さい目標でもいいので、決めてから海外に行くのとそうでないのでは、帰って来てからの達成感や、満足感が違います。ぜひやってみてください。

このようなとても貴重な体験ができて、明海大学にはとても感謝しています。

## ロサンゼルスでの成長と気づき

### 2年 平野 みずき

私は夏休みに奨学海外研修として3週間 UCLA Extension の語学プログラムに参加しました。今年の春休みには友人と二人でオーストラリアのマンリーという場所に短期留学したので、海外に行くことは初めてではありませんでした。そしてこの UCLA Extension の研修が決まった時には、以前オーストラリアの学校で理解はできていても周りに圧倒されて発言ができなかったことやそれに加えて積極的に外国人の友人を作ろうとしなかったことへの後悔は絶対にしないようにと心に決めていました。そしてオーストラリアのオーージングリッシュとアメリカングリッシュなどには発音や使う単語の違いや人と人との距離感の違いなどがあると聞いたことがあり、興味がわいたのでそれらについて現地に行き実際はどうか自分で確認したいと考えていました。

授業では、午前のクラスは明海生が1人もいなく私含め日本人が6人、それ以外はみんな外国人で他のクラスに比べると日本人が少なかったのですが、私以外の日本人は有名な私立大学の生徒で頭がよく英語も流暢に話せていました。初めはまた周りに圧倒されなかなか発言できず以前のつらかった思い出がよみがえり、「学校に行きたくない、はやく日本に帰りたい」と毎日のように寮でルームメイトに呟いていました。しかし、午後の授業で受講していた Spoken Communication でも同じ外国人のクラスメイトが何度か話しかけてくれたおかげで午前の授業でも以前よりは自分から発言できるようになり楽しめるよう

になりました。午後の授業もまた外国人が多かったため、日本語が全く通じない人と英語で意思疎通を図ることで自分の本当の英語力を試す良い機会にもなりました。卒業のセレモニーの日には現地で仲良くなったいろいろな国の人と SNS での繋がりができ研修から帰ってきた今でも LINE などでのコミュニケーションをとることができています。

自分が興味を持っていた 2 つの国の違いについては学校ではなく主に日常生活で地元の人たちが話しているのを聞くことや質問をして答えを聞いたときに気づいた点がいくつかありました。なにかについてお礼を伝えるときに“Thank you”というオーストラリアでは“*No, worries*”と言われ、アメリカでは“*You're welcome*”と言われました。また、とてもよく耳にしていたのは“*can't*”の発音の違いでした。オーストラリアでは「カーント」、アメリカでは「キャント」というのは本当でした。アパレルや飲食のお店での接客の距離感についてはあまり違いを感じませんでしたが、やはり日本と比べるとフレンドリーなところが多いと感じました。

この研修を通して、英語力を試し上達することだけではなく、色々なことに興味を持つことや以前できなかったことを今回はするという目標にそれを達成することができました。自分にとってすごく良い経験をさせていただきました。様々な面でこの経験を活かしていきたいです。







私が今回の研修で学んだことは、自主性を持って行動することの大切さです。私は UCLA Extension のプログラムに参加しました。私のクラスは日本人が半分、その他は中国、韓国、イタリア、フランスから来た生徒でした。最初の授業で、Big Bang Theory というアメリカのドラマを使って文化を学んだのですが、私は内容が全く分からず、その後のディスカッションで自分の意見を一言も言えませんでした。その日はとても落ち込んだのを覚えています。その事が悔しくて次の日は予習をしてから授業に臨みました。そうしたら、初日より意見を言うことができ、予習の大切さを痛感しました。他にも日本で授業を受ける時と違うことがいくつかありました。アメリカでは Kahoot! というネットを使ったクイズゲームをしました。全員がログインをして、順位を競うものです。日本ではこのような授業をしたことがなかったので、新鮮でとても楽しかったです。また、日本との授業形式の違いに驚きました。日本の授業では、先生が講義をし、それを生徒が静かに聞きながらメモをすることが多いですが、アメリカでは生徒が発言をしてそれに対して先生が答えて、答えを導き出すという授業形式でした。日本人は日本の授業に慣れているので、発言する人は少なかったのですが、ヨーロッパから来ている人たちはとても発言が多かったです。先生が話している最中でも発言をし、先生もそれを好意的に捉えて会話をしていたことに驚きました。私がイタリア人の男の人と話した時、発音のなまりが強くて聞き取るのが難し

かったです。彼の発音が明らかに違っていた時、私が聞き返すとその子は自分の意見を曲げず、間違いを受け入れてくれませんでした。私はその時なんて性格の悪い人だ、と思いました。しかしその後、彼とグループで遊び、本当はとてもいい人だとわかりました。これは彼の性格ではなく国民性だと気づき、文化の違いを感じました。また、街で会うアメリカ人も気さくで優しい人が多かったです。友達と道に迷っている時、向こうから話しかけてくれて道を教えてくれました。日本人は基本的に知らない人とは話さないもので、だれでも気さくに話しかけるアメリカの文化をととても良いと思いました。休みの日は大学の友達はもちろん、この研修で初めて会った友達ともたくさん遊びました。この研修だけでなく、もし留学をする機会があれば元から知っている友達だけでなく、色々な人と遊ぶことをお勧めします。それによって友達の輪が広がるだけでなく、私は自分の価値観が少し変わりました。たくさんの人の考え方を知ることによって、前よりも自分と違う意見を持った人に対して、寛容になれた気がします。そして何事も誰かがやるのを待つのではなく、自分から行動することが大切だと感じました。日本にいてもできることはたくさんあるので、これからも自主性を持って、色々なことに挑戦していきたいです。

## LaLaLand をめぐるバス事情

### 3年 山本 瑞帆



タイトルにある LaLaLand という言葉ですが、最近では映画「ラ・ラ・ランド」の影響で耳にした方も多いのではないのでしょうか。実はこの言葉は今回の研修先である UCLA が位置するロサンゼルス の略称である LA と、陽気な響きを持つ LaLaLa という言葉を掛け合わせたもので、しばしばロサンゼルス のことをこのように呼ぶのだそうです。そして、この“LaLaLand”は

私の大好きなものがたくさん詰まったまさに夢のような街であり、私は研修期間の最後の一秒まで充実した日々を過ごすことができました。その中でも一番アメリカらしさを感じた場所は、市民の足である公共バスです。私と友人は放課後や休日に外出する際の交通手段としてバスを利用しました。バスは 3 種類ほどあり、一番利用されているものは Metro という会社のもので、料金は日本の距離に対して加算していく方式とは異なりどこに行く

にしても一律\$1.75しかかりません。しかし、この低価格の運賃は私たちのような学生や旅行者に乗りやすさを提供している一方で、「誰でも乗れてしまう」環境を作っているようにも感じました。

まず、乗車した際に驚いたことは、運転席の周りが厚い透明のカバーで覆われていたことです。乗客と運転手が激しく揉めている現場を何回か目の当たりにしたので、これは最悪の場合を考慮した上での措置なのだ と解釈しつつ、たとえ公共の乗り物であっても決して気を抜いてはならないという事実を物語っていました。

そして、特に印象に残ったのは、私が最初にバスに乗った際に目の前に座っていた白人と黒人の2人の中年男性です。この2人はまったく違和感なく隣同士で座っていたのですが、どちらの男性もベトナム戦争の文字が刺繍された年季の入った帽子をかぶっていました。それを目にしたとき私は、ベトナム戦争が勃発した彼らが若かったころのアメリカでは、このときのように白人と黒人がバスの席で隣同士に座ることなど考えられないことだったのではないかと想像しました。アメリカの現在のような多様な人種がともに暮らしている歴史を見事に象徴していた感慨深い出来事でした。

また、私はバスを利用した経験を通して、今の日本人にはおもてなしの心があっても、思いやりの心が足りないのではないかということに気付かされました。ロサンゼルスの人々はたとえ赤の他人だったとしても、常にお互いを尊重し助け合っていました。これを私たち日本人に置き換えたときに同じことが言えるかといえば、誰にでも当てはまることではないと思います。私はこれから日本で生活していく中でロサンゼルスの人々を見習い、どんな相手に対しても尊重する意思を忘れずに向き合いたいと思います。

## 留学で学んだこと

### 2年 宗形 萌里

私は夏休み中の3週間、UCLAの語学研修に参加させていただきました。海外に行くのは初めてだったので不安でしたが、実際に異文化に触れてみたい、自分の知らない世界を見てみたいという気持ちがあったので、この機会をいただけたときは本当に嬉しかったです。楽しみと不安が入り混じる中、空港で家族に別れを告げ、日本を出発しました。ロサンゼルス国際空港に到着した時は、本当にアメリカに来たのだという実感が湧きました。翌日にクラス分けテストが行われました。クラスは20人ほどで、その中の半分が日本人で、他は中国人か韓国人、台湾人でした。クラスメートの日本人のほとんどは早稲田大学の人で、やはり授業のレベルも高かったです。私たちのように英語を専攻している人ではない人も結構いて、驚きました。授業は午前3時間、午後2時間行われました。私は午前の授業はIntermediate ClassのAcademicとCulture、午後の授業はDiscover LAをと

りました。Academic の授業では、自分の理想の結婚や男女の違いについてペアで話し合ったり、男女間に起きたあるシチュエーションをどう解決すべきかななどをグループで話し合いました。この授業では私の知らない単語がたくさん出てきて、とてもいい勉強になりました。Culture の授業では、アメリカで支持を集めているコメディードラマである

“Modern Family” と “The Big Bang Theory” を観ました。私は海外のコメディードラマを観たのは初めてで、字幕はついていましたがすごいスピードで話されるため、理解するのが難しかったです。Discover LA では、Venice Beach や Hollywood に行きました。そこで現地の人にインタビューをするというのが主な内容でした。この授業では、早稲田大学のひとと仲良くなれて嬉しかったです。この授業をとって良かったと思っています。

今回の研修で、アメリカ人はとてもフレンドリーで、お店に入ったら「Hi!」と気さくに声を掛けてくれたり、道を尋ねると、案内してくれたり、とてもいい人たちがばかりだなという印象を受けました。初めての海外で、たまにホームシックになることもありましたが、友達がいたのでとても有意義な時間を過ごすことができました。週末の友達とのお出掛けもとても楽しかったです。人との出会いから得ることがたくさんあり、その人たちとの出会いが私を成長させてくれたように思います。私は消極的だけど、積極的な人と触れ合うことで、私ももっと積極的になりたいと思いました。他国の人と触れ合い、実際に英語でコミュニケーションをとる生活は思ったより楽しかったです。何より、他国の人とコミュニケーションをとったことで、自信がつかえました。今回の研修で、自分の英語力を把握し、英語に対するモチベーションも高まりました。意識を変えるきっかけをもらえたことをとても嬉しく思っています。実際に海外に行かないとできなかった経験をたくさんしました。



それらの経験は、私にとってとてもかけがえのないものになりました。世界が広がったように感じています。貴重な機会を、ありがとうございました。

---

## 海外英語研修 カンタベリー・クライスト・チャーチ大学（イギリス）

---

### 充実した3週間のイギリス生活



2年 齋藤 苑香

私は2017年の夏にイギリスのカンタベリー・クライスト・チャーチ大学へ約3週間の研修へ行きました。私はこれまで、海外に行ったこともなくまた留学をしたいと前々から思っており今回の研修への参加を決意しました。日々の学校生活では少人数クラスでテキストを使った学習やスピーキング、ゲーム、ディスカッションなど様々な授業を受けました。私のクラスは地方から来た日本人の学生が多かったのですが学生のレベルが高く来た当初はついて行くのに必死でした。しかしクラスの先生がとてもフレンドリーで明るく、間違えてもいいから恥ずかしながら発言しなさいと行ってくださり自分に自信を持って授業に望むことが出来ました。そして分からないところを丁寧に教えてくださり、毎日の授業や宿題、そして必然的に英語で話さなければならない環境に置かれていたため自分でも自覚できるほど初日より力がついたと思いました。また、毎週水曜日の授業終わりに明海生だけの特別授業を催してもらい日常会話の細かい間違いやポイントなどを教わることができ自分でも気づかなかったケアレスミスを知ることができました。カンタベリーでの暮らしでは近所にはスーパーマーケットや£1 shop（日本で言う100円ショップ）また多くのカフェや雑貨屋、本屋などありとても有意義な時間を過ごすことができました。カンタベリーの人々はとても親切で困った時に聞いても丁寧に答えてくださりフレンドリーに

世間話などすることが出来ました。休日は友達と Dover 海峡やロンドン、また大学で出来た友達とカフェに行ったり、寮のみんなで夕飯を作ったり、そして寮のすぐそばにあるカントベリー大聖堂には学生は学生証をみせたら無料で入ることが出来たので工事前に入ることが出来ました。中では牧師さんが詩を朗読していたり、オルガン演奏をしていたり、内装もステンドグラスやシャンデリアがとても綺麗で感動しました。そして何よりイギリスの文化や習慣を肌で感じる事が出来て日本にいたら出来ないことを多く体験することが出来ました。今回の研修を通して、私は自分に自信を持つということ人と人との関わりや温かさを知ることができました。そしてこの研修を経て新たな目標も出来ました。研修に参加をすることを迷っている人がいたら是非参加してほしいと思います。自分が想像していたよりもはるかに楽しく充実した日々を過ごすことができ英語においても人間的にも参加する前より大きく成長した自分になれると思います。

## イギリスで得たもの

### 3年 堤 馨

私は「英語を自分のものにして話したい、海外の文化に触れてみたい」と感じたのがきっかけで、この海外研修に参加しました。もともと欧米の文化が好きで、音楽を聞いたり映画を見ていましたが、実際に英語を話すのは苦手でした。授業やアルバイトでは自分の伝えたいことがうまく表現できず、もどかしさを感じるばかりでした。そのため海外の環境に身を置き、とにかく多くの人と話して英語に馴れよう、と決心しました。

3週間の研修を通して、まず始めに「何でも気軽にやってみよう」という行動力が付いた



と感じました。到着初日は、本当に生活していけるのか、授業について行けるのか不安でした。しかし、何よりもオープンで親切なイギリスの人々と接し、恐れずに話してみれば、自分のたどたどしい英語でも伝わるのだとわかったし、馴れない海外の生活も楽しむことができました。それからはむしろ自分がそれに答えていかなくてはいけない、思うようになり、自分がやりたいことに対し積極的になりました。

初回の授業ではチームに分かれてゲーム形式で行うものが多く、私にとっては英語に馴れる良い機会になりました。他にも英字新聞を読んで感想を述べたり、自分の身近な話題や難しい社会問題についてディスカッションするなど、自分の意見を発言し

なければいけない場面が多くありました。そんな時思い知ったのが、言いたいことがあっても考えるのに時間がかかってしまい、なかなか発言できずにいたことでした。特に「こう思いました、これが好きです」と言ったことに対して、“why?”と返され、返答に困ることが多くありました。外国では、普段の会話の中でも自分の意見がしっかりしているのに対して、私は理由を述べることを意識していなかったため、難しく感じました。英語の会話で簡単なことは話せても、途切れてしまうことが気掛かりでしたが、自分から理由を述べたりして会話を広げていくのが大切なのだと気付きました。

カンタベリーでの生活は、私にとってとても良い体験となりました。歴史的な街作りの中にあり、観光名所や学生街ということもあって、センター街はいつでも多くの人で賑わっていました。路上では日々マーケットやパフォーマンスが開かれ、毎日和やかな雰囲気でした。もっとも印象的だったのが、気軽に挨拶したり話しかけてくれる現地の人々のオープンさでした。知らない人同士でも親身になって会話を楽しんでいるのを見て、まだまだ自分の英語力では足りないが、いつかは世間話ができるようなら、という新しい目標を持つことができました。

他にも、他大学のクラスメイトと外食したり、自分たちでロンドン観光を計画するなど、初めての体験ばかりでした。研修を通して、やりたい事に向けて恐れずにチャレンジすれば、良い結果となって自分に返ってくると学びました。この海外体験を今後の生活にも活かしていきたいと思います。



## 日本人と他国の人々の違い

### 2年 長谷川 裕晃

私は、今回の海外研修を通して日本人と他国の人々の人間性の違いを知ることができました。ここで「イギリス」ではなく「他国」と表記しているのは、空港ではもちろん、滞在先のカンタベリー地区でも、様々な国から来た人々と出会えたからです。まず私たちがイギリスに着いた後、私がヒースロー空港で入国審査を待っている時、周りの人たちが会話を楽しんでいることに気付きました。日本人の場合、空港などで長い時間待つ時は、大体の人がスマートフォンやポータブルゲーム機などを使って暇をつぶします。みんな下を向いている光景は非常に奇妙です。そして案の定、私は周りの状況に気付くまでスマートフォンを操作していました。しかしながら空港にいたイギリス人を含めた外国の方々は、

みんな頭を上げて会話を楽しんでいました。些細なことかもしれませんが、まさか空港でこんな違いに気付くと思っていた私は、とても驚きました。そして滞在先のカンタベリーでも様々な人と出会い、日本人との違いを知ることができました。

例えば、とある日のランチタイムに寄ったハンバーガー店の店員さんは、アフガニスタン出身でした。その時の私はまだカンタベリーにきて間もなく、お店で何かを買うのにも少々不安が残っていたのですが、その店員さんは気さくな方で、笑顔で話しかけてくれました。アフガニスタン出身の彼が、イギリスという異国の地で、日本という異国から来た私たちに笑顔で話しかけてくれたことに私はとても感動し、勇気を貰いました。他にも、イギリス内外問わず、様々な場所からカンタベリーに来た人々と話すことができました。ある人は、私が間違った単語を使ってしまったときに、変な顔をせず正しい単語で聞き返してくれました。また別の方は、私と友人が立ち止まり、道を確認していると「大丈夫かい？」と声をかけてくれました。しかも1人2人ではありません。数えきれないほどの親切な方々に助けられました。その度に私は感謝するとともに、とても悔しい気持ちになりました。私は日本で出会う外国の方々にカンタベリーの人々ほど親切な対応ができていませんでした。そのことがとても悔しく恥ずかしかったのです。そして私は、カンタベリーの人々のように外国の方々にも親切に対応できる人間になろうと決心しました。英語力の向上ももちろんですが、私の考えが大きく変わった今回の海外研修は、私にとってとても有意義な時間となりました。





## 今までにない経験を

2年 春名 貴博

まず始めに、この研修へ参加しようと思った動機は、私生活の中で英語圏の旅行者と会話などで関わったとき、日本にはわからないようなことをたくさん知りもっと様々なことを知りたいと思い今回のカンタベリー研修の参加を希望しました。今回の研修が初めての海外で期待よりも不安や心配事が大きく、現地



に着くまでとてもドキドキしていました。しかし、現地について生活を始めると現地の人は皆優しく、自由でのどかな日常を見るたび不安や心配は嘘のように消え、とても楽しくなりました。カンタベリークライストチャーチ大学での授業はレベルでクラス分けをするため、自分に合った授業を受けることができました。午前中はテキストを使った授業やゲーム形式で英語を学ぶ授業、午後は「Listening」「Writing」「Speaking」「Reading」の4スキルを日替わりで学びます。どの授業も日本では経験できないアクティブな授業でとてもためになるものでした。毎週火・木は授業後に大学のイベントがあり、スポーツやゲームをして他の学生と交流する時間もありとても充実していました。カンタベリーの街には様々なお店が並んでいるので、カフェでお茶をして帰ったりお店で買い物したりしました。買い物など最初は店員さんの話すスピードが速く追いつけず苦戦しましたが、買い物へ行くたび徐々に聞き取れるようになり最終的には毎日行っていた学生寮近くのお店の店員さん



と買い物ついでに話すようにまでなりました。その出来事は自分の英語力向上につながりなにして海外の人と交流できたというとても大きな経験を得ることができました。休日は時間があるのでロンドンやカンタベリーの街外れなど様々な場所にも行くことができました。ロンドンに行った際には電車の乗り方やイギリスの交通ルールを観光しながら学ぶことができ一石二鳥のよ

うでした。カンタベリーの街外れはまた違う姿を見せ本当にのどかな田舎町がありました。牧場や農園、広大な土地...、どれもすてきな景色でした。さらに私達が道で迷っていると優しく声をかけてくれる心優しい人で溢れていて日本ではなかなかない雰囲気を感じることができました。今回の語学研修で私はここに全てを書き切れないほどの経験をすることができました。英語力向上以外にも現地の方々の人柄や生活などとても貴重なことを知り、学べ、経験できてカンタベリークライストチャーチ大学研修へ参加できたことをとても良かった思いを胸に抱き、帰国することができました。



## 充実した留学生活

### 2年 三浦 江梨花

今回私はイギリス、カンタベリー・クライスト・チャーチ大学で海外派遣研修をしてきました。わかったことは、ただ黙っているだけでは誰も相手にしてくれないことです。つまり、自ら行動しなくてはいけないということです。この海外研修ではイギリスの人からしたら日本人は外国人でアウェーな環境でした。最初の2日間は自分から話すことが出来ず、学校の先生たちとコミュニケーションがなかなか取れなくて悔しい思いをしましたし、授業にしっかりついていけませんでした。かなり自信を無くしていました。これではいけないと思い次の日から自分の知っている単語を使って言葉にしてみました。そうしたら、研修先の先生たちとコミュニケーションをとることが出来ました。段々と自然に自信はついていきましたし、授業でわからないことがあればすぐに質問をしたので授業についていけないということはなくなりました。やればできるのだなと実感することが出来ました。また、留学は当然海外です。なので、日本でのやり方は通じません。イギリスでの生活習慣に合わせるのも大変でし



た。一番困ったのは食事です。外食しようと思うとだいたいフィッシュアンドチップスやハンバーガーなどのジャンクフードでした。しかも、量も違います。日本で考えるミディアムサイズとイギリスでのミディアムサイズはかなり変わってきます。私はそれをわかっていなくて普通に頼んでしまって失敗しました。夜まで胃もたれが続いて本当につらかったです。あとは、自分の考え方が広がったのではないのかなと思います。今回の留学で友達になったのは日本人だけでなく、スペイン人やイタリア人、韓国人もいます。様々な文化、考え方、価値観に振れたことで自分の中の視野が広がっていったように感じます。

イギリス、カンタベリーの海外研修で留学する前の自分と比べて研修をし終えた自分は積極的になったし性格的にも明るくなったのではないのかなと思います。前は文法のこと絵を気にしすぎて言葉にするのが遅くなってしまいました。しかし、研修中はすぐに言葉にできました。研修前は文法を間違えないように深く考えてから話していました。研修中は文法を特に気にせず話していました。大体伝わっていたので、楽しくて自分から話すことが出来ました。また、英語を勉強する友達がたくさんいたので勉強にも集中できました。この海外研修を通して学んだことや得たことはこの先の自分にとっても役立つものになりました。英語を勉強している人で自分はこれからどうするか悩んでいる人は留学してみてもどうでしょうか。きっと自分の自信につながる良い留学になると思います。



## 英国 Canterbury Christ Church 大学 (2017.8 - 2017.9)

脇山 清美



私は3年の夏休みに大学の海外研修プログラムに参加し、イギリスへ行ってきました。イギリスに到着した最初の頃は自分が学んできた英語が日本の大学のネイティブの先生以外の外国の方にしっかりと伝わるか不安に感じていましたが、一度話をしたり質問をしたりすると、相手の人は私が英語母語話者ではないことを理解してくださり、優しく色々なことを話してくれたり教えてくれたり、聞き取りやすくするために普段よりゆっくり話してくださり、少し緊張しながらもその相手の方と話すことができました。その中でも私の心に残っていることは、私が図書館で研究に必要な本を探しているときに現地の学生の方が声をかけてくださり、本当に親切にさせていただいたことです。私は今回が初めての海外研修であり、出国前にニュースでテロなどの報道が流れていたこともありかなり不安に思う点がありました。しかし実際に現地で生活してみると私が出会った方々は大学関係者に限らず、本当に親切な方ばかりでした。イギリスでの生活に慣れてきたころには英語で話すこと、コミュニケーションがとれることが楽しくなり、大学の先生だけでなく店員さんや色々な人と話すことができました。また自分の英語でも理解してもらえたことで自信が持てるようになりました。さらに私はこの研修期間中に特別な体験をさせていただくこ

とができました。それは現地に住む方のご自宅に滞在させていただくということでした。待ち合わせ場所のバス停に到着すると、奥様とその娘さんの二人が迎えに来てくださり、近くのデパートの中にあるカフェで一緒にお昼ご飯を食べました。その方の自宅に到着すると家族全員で私を迎えてくださり、とても素敵な料理を夕食にごちそうしてくださいました。そのご家族は父の古い友人であったこともあり、日本から留学に来た私にとっても親切にしてください、さまざまな楽しいお話をしてくださいました。私たちが研修期間中に宿泊していた場所は大学の寮であったため、普通ではできないイギリスの家庭の雰囲気を肌で感じることができました。

1年生の頃からこの海外研修に興味を持っていましたが、自分の英語力ではダメだろうと思ってしまい先延ばしにしていました。しかし、この海外研修では学年関係なく自分の英語力にあったクラスで学ぶことができます。留学や研修に少しでも興味がある方は早い時期に参加することをお勧めします。この研修で私は英語でコミュニケーションがとれることの楽しさを感じられることができました。その経験から私は今後の学生生活では自分から英語を使う機会をつくり、自分の英語力をより高度なものにしたいと思います。さらに、私は教職課程を履修しているのでこの海外研修で学んだことを教職の模擬授業や、来年の教育実習等に活かしたいと考えています。

\*\*\*\*\*



米国UCLA英語研修 2017

---

# GSM フィールドワーク参加報告

---

## カンボジアの文化・歴史に触れて

2年 前山 一弥

私は、2017年の9月1日から7日までの一週間、海外ボランティアのカンボジアスタディツアーに参加しました。私はカンボジアがあまり治安の良い国ではないと思っていたので不安しかありませんでした。しかし、カンボジアで過ごし始めるとその不安もすぐになくなりました。私が滞在したのはシェリムアップという街でカンボジアでも特に安全な街でした。現地の方もとても親切で気安く話しかけてきてくれました。カンボジアはアジアで二番目に貧しい国ですが、人がとても暖かく、そのようなことは一切感じませんでした。

スタディツアーは孤児院や小児病院の訪問、地雷博物館見学や遺跡巡りなどやること多い日程でしたが、全く疲れることはなく、新鮮なものばかりでとても充実していました。特に印象に残っているのが孤児院の訪問と遺跡巡りです。まずは孤児院訪問ですが、これは子ども達と一緒に遊んだり、カレーライス作りをしました。カレーライス作りは手伝うことがあまりできなかったのですが、子ども達と長い時間遊びました。子ども達はとても元気で有り余るほどの体力を持っていたので、自分の体力の無さに落胆しました。それにカンボジアはとても暑い国なのでペットボトルの水は欠かせなかったです。ですが、とても楽しい時間を子ども達と過ごすことができました。

次に遺跡巡りですが、これはアンコール・トム/ワットの観光で、ツアーの中で一番の思い出になりました。アンコール・トムはあまり知られていないかと思いますが、とても巨



大で美しい細工のなされている建造物でした。数十メートルはある巨大な蛇の石像、それを引っ張るような形で置いてある人型の石像など昔の人が作ったとは思えないほど精巧なもので強く印象に残りました。アンコール・トムに行く途中で象乗り体験があり、それで向かいました。車などとは違

った乗り心地で、日本ではできない素晴らしい体験でした。

アンコール・ワットはカンボジアの象徴とも言える建造物で三つの回廊からできています。回廊の壁一面にカンボジアの歴史、文化に関わる絵がありどれほど見ても飽きないほど素晴らしいものでした。アンコール・ワット観光をなぜ午後になっているかという夕日の光がアンコール・ワットに当たり、黄金のように光るそうです。実際にこれを見たとき、言葉では言い表せないほどの感動がありました。

このツアーに参加したことで自分の世界に対する見方、考え方が変わり、様々な文化に触れてみたいと思うようになり、そのためにも英語をしっかりと勉強しないといけないとも思いました。カンボジアは壮絶な戦争を背景に独自の文化を守りつつも急成長を遂げている国です。実際に訪れ、文化に触れることは今じゃないと難しいものなのでスタディツアーに参加できてよかったと心から思っています。



私は夏休みに大学の派遣インターンシップとしてラフォーレリゾート修善寺で働かせて頂きました。このインターンシップに参加した理由は、大学2年の時にANAの産学連携の授業を受けてホテル業界について興味を持ったためです。そのため、実際に住み込みでホテルの仕事を従業員と同じ目線で経験することでホテル業界の現状を自分自身の肌で感じたいと思い応募しました。私がこのインターンシップで経験したことについて紹介させていただきたいと思います。

私の配属先はホテルラフォーレ修善寺のホテル棟を新たにリブランドオープンした「伊豆マリオットホテル修善寺」内のレストラン「グリル&ダイニングG」でした。私の出勤初日がちょうど一般のお客様への公開初日だったこともあり、現場は独特な緊張感でつつまれていました。その中で仕事することになり不安がありましたが、社員の方が仕事のことを一から丁寧に教えてくださったために安心して仕事に臨むことができました。また、仕事を覚えていくことでその時のお店の状況やお客様の様子がわかるようになり、お客様が何を求めているのか考えて行動するようになりました。お客様から名前を呼ばれて感謝の言葉を頂いたときはとても嬉しかったのを覚えています。この仕事を通じてお客様に対して細かなところまで目を配ることの重要性やたとえお客様が声を出して求めていなくても早く動き出すための準備することの大切さを学びました。

また、今回のインターンシップで共に過ごしたインターン生にかなり助けられたと思います。初めての寮生活ということもあり、うまく体調管理できるか心配でした。また、毎朝5時に起きて就寝が12時以降という生活リズムを作ることや慣れない仕事を覚えることに必死でした。そのため、最初の頃はかなり疲れが溜まっていたと思います。しかし、同じ境遇のインターン生と休み時間に話したりして仲良くなっていくことで仕事に対して





楽しさを感じるようになりました。またインターン生の多くがホテル科の専門学生ということもあり、仕事に対しての姿勢や取り組み方は自分にとってかなり刺激となりました。そのため、そのようなインターン生に積極的に話しかけて仕事のことでアドバイスをもらって自分の意欲も高めていました。ホテルの仕事は個人のスキルはもちろんのこと、仲間と協力して成り立っている仕事なのだとこのことから深く実感しました。

今回のインターンシップで他では経験することのできないことをさせて頂いたと思います。そのような経験ができたのもラフォーレリゾート修善寺の派遣インターンシップに選んで頂いた大学の先生方や手厚いサポートをして頂いたラフォーレの社員の方々あってのことだと思います。このインターンシップで得たことを自分の糧として、これからも積極的に自分から動き出していこうと思います。

## インターンシップは学びの宝庫

3年 戸室 菜々子

私は夏休みに5日間、浦安警察署のインターンシップに参加しました。インターンシップは、千葉県警察主催のバスツアーから始まりました。普段ではなかなか見る機会のない訓練や警察学校の授業など見学することができ、終始有意義な1日目となりました。2日目からは浦安警察署で、各課の警察官の方々と様々な体験を交えながらとても貴重なお話を聞くことができました。



私が今回のインターンシップに参加した目的は、机に向かうだけでは得ることのできない学びを探し、自分の狭い見聞を広げることでした。実際、インターンシップでは、働いたことのない私にとってすべてが新鮮で、特に詐欺やちかん注意のチラシとティッシュを署外で配る活動をした時、「誰かのために働いている」という実感が湧きました。大量に配った訳でもなく、長時間配った訳でもありませんが、カゴの中が空になった時、小さな達成感を味わえました。そして、自分の至らなさを感じた時も多々ありました。一番自分の至らなさが表れたのは、「質問」ができない時でした。インターンシップの最終日に、浦安警察署に勤めている若手警察職員の方々との意見交換会があり、その時絶対質問してみようと思い、事

前に聞きたいことをまとめておいたのですが、緊張してしまい、結局何も質問できないまま意見交換会は終わってしまいました。ことわざに「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」とありますが、まさにその通りでした。何かを学ぶためには聞くことが必要になるにもかかわらず、目的に背く行動をとってしまい、とても後悔しました。ですが、「質問できない自分を変えなければならない」という課題を得ることができたと思います。その課題を克服できるかできないかは自分次第なので、もうこのような後悔をしないためにも一層努力したいと思います。

最後に、そもそもインターンシップとはなんぞや？という方や、どのような制度なのかよく分からない方もいるかもしれません。そこで電子辞書で調べてみると、1番詳しい説明だった山川出版社の政治・経済用語集では、『学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行う制度のこと。雇用のミスマッチ、離職率の増加の解決策として文部科学省や経済産業省、厚生労働省は、学生の職業意識の形成や責任感、自立心の向上、適職の確認などに効果があるとして積極的に推進している。』とあり、学生の将来を決めるためのきっかけ作りとなる制度のようです。現在、多くの民間企業ではインターンシップを取り入れており、期間の短いものでは1dayから参加することができます。官公庁も数は少ないですが取り入れています。自分の将来を明確にするため、何かを学ぶため、成長するためなど参加する目的は様々あると思います。ぜひ、インターンシップに挑戦してみてください。



## 社会人と大学生

### 3年 波多野 巨也

私が今回のダイハツ千葉販売のインターンシップで学んだことは、当たり前のことを当たり前にする難しさと、学生と社会人の意識の違いです。ダイハツの職員の方々は挨拶一つ、服装などの身なり一つ乱れておらず堂々としていて、お客様がご来店からお帰りになるまで最高の接客で交渉を円滑にすすめ、納車のあとも良好の関係を築いていました。この時、「社会に出て働く」ということが自分の思っていたものよりもはるかに難しく大変なことだと痛感しました。

インターンの初日は、他大学から来たインターンの学生とともに、ガイダンスや挨拶やお辞儀など基本的な接客マナーについて人事部の方に教わりました。私はサッカーをして

いるので声を出すことには自信があり、自分にはこんなこと必要ないと軽視していました。しかし声をかけるタイミングや位置など細かいことがたくさんあり、社員の方に何度も修正していただきました。お客さん役でデモンストレーションをした時に、声をかけるタイミングや位置で印象が全然違うということも、身をもって感じることができました。

2日目から5日目は現場に行って、見習い生として船橋の支店で働かせていただきました。出勤したらまず全員でミーティングを行い、前日の報告と当日来店されるお客様の確認をしてから「いらしゃいませ」、「ありがとうございます。またのご来店をおまちしております」などの接客用語を大きな声で発声練習します。その後開店し、続々とお客様がいらっしゃいます。私の仕事は主に、お客様へのお茶だしをして接客を見学することと、洗車のお手伝いをするものでした。4日間ディーラーさんたちの接客を見て思ったことは、営業で大切な事は謙虚な姿勢をもってお客様への接客をして信頼をつかみ、なおかつ「売る」ということを愚直に行うことだと感じました。ディーラーの方に何を意識して営業をしているのかと質問を問いかけた時に「100パーセントを求めて来るお客様に私たちは120パーセントを与えたい。お客様の予想を上回ったときに感動はうまれ、お客様の満足度が上がるんだ」というお言葉をいただき、その言葉が私の心に強く響いたことを覚えています。洗車のお手伝いをさせていただいたときも、作業員の方々は普段は見えなくて、作業もきちんときれいにしていました。当たり前のようにみえて、そういう細かいことを妥協しないですることはとても難しいことだと感じました。

最終日は、初日のようにインターンの学生全員と人事の方で、反省と学んだことについて話し合いをしました。みんなそれぞれ感じた事がことなり、私が気づけなかったことも気づいていて、そこでまた勉強することができました。今回のインターンを通じて自分の人としての未熟さを感じ、日々の生活から正していこうと思いました。それと同時に就職活動への意識も大きく変わりました。



## 英米語学科 卒業論文発表会 報告



外国語学部英米語学科の「卒業論文発表会・卒業研究報告会」が3月7日（水）午前9時30分から行われました。卒業論文発表者は5名。各ゼミの教員からも、卒業研究報告がなされました。

卒業論文の発表者たちは、4年間で培ってきた本学の建学の精神である「社会性・創造性・合理性」をそれぞれの研究の視点・論点に生かし、卒業論文として結実させていた

ことが印象的でした。これまで積み重ねてきた努力あってこそ、質疑応答で自信に満ちて答える姿も、輝いて見えました。卒業論文を仕上げるプロセスで学んだ、さまざまな大切なことを、ぜひこれからの人生にも生かしていってほしいと思います。



2017 年度卒業論文発表会  
発表者・論文題目

織田 杏里

「道徳的価値の創造と発展 —モラルジレンマ授業の有効性に関する研究—」

秋山 聖奈

「時代ごとのディズニー長編アニメーションにみる英語における  
女ことばの変容 —『白雪姫』・『美女と野獣』・『アナと雪の女王』の比較—」

木村 圭太 「映画にみるビジネスポライトネス」

工藤 仁生和 「ことわざの日英比較 —フェイスの概念との関連性の検証—」

岩澤 里菜 「子どもの貧困と社会的包摂 —子ども食堂から考える—」



---

## 複言語・複文化教育センターの活動報告

### Meikai Plurilingual & Pluricultural Education Center (MPPEC)

---

#### Welcome to MPPEC !

**Patrizia M.J. Hayashi**

In April 2017, the Meikai Plurilingual and Pluricultural Education Center, known as MPPEC, opened its doors to much excitement. This new center has become a hub of language learning at Meikai. For English Department students, the focus of activity will center around the English Zone. This space is dedicated to English language learning. MPPEC is also where your teachers for Integrated English can be found. Every day, English is constantly heard and spoken in MPPEC. Furthermore, we have student newspapers for you to read, English news programs play on the TV screens at lunchtime, and we have a monthly English newsletter to keep you updated on news and events. Read on below to learn all that we have in store for you this year. We expect MPPEC to become an integral part of your four-year English study program at Meikai University.



## Integrated English, First Year

Nick Dalziel

In the first year of the Integrated English program students are encouraged to develop a wide range of skills. These skills include critical thinking on contemporary topics introduced in the Pathways series of textbooks. Along with critical thinking ability, students acquire the functional language and communication skills necessary to have topic based discussions in pairs and small groups. At the completion of each topic, students participate in a task designed to allow students to demonstrate the content knowledge and language skills they have developed during the unit. Fluency development is another important part of the first year Integrated English program. Through repeated timed, paired speaking activities students are able to improve both spoken fluency and accuracy. Activities like these also allow students to become active listeners who react to their classmate's comments while engaging in meaning focused communication. To summarize, the first year program develops critical thinking skills through the discussion of contemporary topics while building functional language skills, fluency and accuracy.



Classes A, B, C

Classes D, E, F



## Integrated English, Second Year

Will Simpson

In the second year of Integrated English (I.E.) students continue to build on the speaking and listening skills which they develop in the first year. The kinds of textbooks and assessment we use in the second year are very similar to the first year, so the classes should feel very familiar to students. In expanding on the first year I.E. classes teachers try to get students to use English to discuss both local and global issues - things which affect students in their everyday lives, and also the global issues that affect us all. We encourage students not just to speak more, but to listen more – to hear what other people have to say, to think about what they are say, and to respond to it. In their second year, students have the chance to use English with new people as they will have new students in their classes, as well as with those who they know well from the first year. English zone offers a great opportunity to meet students from other departments, other years of study, and other English teachers from the MPPEC centre. Especially for second years, it offers great opportunities for students to practice speaking and listening English, to prepare for tasks or tests like Eiken, and to have fun and meet new friends.



Classes A, B, C, D

Classes E, F, G, H





## Independent Study

**David R. Phillips**

Maximizing the exposure and experience that you have with English outside of the classroom is a very important part of acquiring the English language. Increasing the time that you spend interacting with and communicating in English can support the information that you are taught in class, but it has many other benefits as well. These out-of-class experiences with English can also help you notice the gaps in your knowledge when communicating and introduce you to authentic words and expressions that you may not hear or read in class. Moreover, this self-study time can be fun, engaging, and empowering since you are making the decisions about what you are learning: read comic books, use apps, listen to music, or choose anything that interests you! If you only spend a limited amount of time with English outside of class, then the English language learning process becomes slower and more difficult. Make English a part of your daily routine wherever you go and you can greatly improve your ability at a much faster rate.



## English Zone at MPPEC (2017-2018)

**John Gerard Fagan**

In 2017, English Zone replaced the old English Speaking Salon (ESS) at the refurbished MPEC sector of Meikai University. The new place was designed with an emphasis on student-to-student English communication. We provided more than 300 question cards



with over 1000 questions, in a variety of topics, to spark conversation between the students from all departments at the university who visit the zone. We also held several events throughout the semesters where students socialized and tried food from around the world, like Scottish haggis and Australian vegemite. The International Fair held in December

in particular was a great success. It had excellent presentations from students that had travelled abroad to places like Cambodia, the US, and Ireland, and presentations on topics from Japanese culture to the history of football. The English Zone is available to all students Monday to Friday, 4<sup>th</sup> and 5<sup>th</sup> period.



## Teacher Training Sessions in English Zone

**Tyson Rode**

This year was another very active and exciting year! Special lessons for students in the teacher training program were held for the first time in the newly created English Zone in the Meikai Plurilingual & Pluricultural Education Center. Students who attended these sessions participated with enthusiasm and passion. We are confident that they will become excellent educators in the future. Some of the topics covered included, but were not limited to: extensive practice of English interviews and model lessons for the second stage of the teacher's examination; useful classroom English; how to give instructions in English; how to communicate quickly and efficiently with an ALT (Assistant Language Teacher); effective team teaching with an ALT; designing



worksheets and great communicative activities; activity ideas for intercultural events etc.

Although this program started about four years ago, it continues to develop every year. There are

two main purposes to this program. First, during the first term, in coordination with the Meikai University Teacher Training Education Center, we work on preparing fourth year students for the second stage of the teacher's examination. Second, during the second semester, give all students many opportunities to practice team teaching and effect communication with an ALT. Practicing team teaching in English will give students confidence when they have to teach when entering a school or other educational institution. We encourage all students with an interest in teaching to attend these sessions, every Thursday in 4th period in the English Zone.

## Intensive Course

**Jason Clarke**

The Intensive English Course is held every year during Meikai's spring holiday. Students from all years and all departments are welcome to join. As well as English majors, we also have students from Economics, Japanese, Chinese, Real Estate, and Hospitality & Tourism, so you can meet students from all over the university. There are six classes divided by level. Each class usually has 12 to 15 students. The course is ten days long and



is from 10 a.m. to 4 p.m. every day so students get a total of 50 hours of English practice.

There's no course fee, students just have to buy the textbook, and they get two credits

for the course.

The focus of the class is on speaking. Classes usually spend the morning doing activities from a textbook. Students learn new vocabulary and discuss a variety of interesting topics. They learn how to give their opinions and ask other students about their ideas. In the afternoon, we often do video activities or prepare for the presentations at the end of the course.



Students are put into pairs to research and prepare a presentation together. They learn how to present their ideas and then make a poster about their topic. On the last day, all the classes are combined. Everyone will have a chance to both give their presentation and listen to many other interesting presentations. The intensive course is a lot of fun and also a great way for students to get practice and experience speaking English.



## MPPEC Challenge

**Roy Morris**

At Meikai, we value self-directed study, and want to encourage you to learn more about things that interest you. To help you all to do this, there will be a number of exciting English challenges for students to participate in, with prizes for the top achievers. Come to MPPEC to find out more!





*Photos from  
Halloween  
Party &  
International  
Fair 2017*



---

## 第 10 回明海大学英语スピーチコンテスト報告

---

On Dec. 21<sup>st</sup> we held our 10<sup>th</sup> All-Meikai University English Oratorical Contest. We had 7 entries, 5 students from the Department of English and 2 students from Hospitality-Tourism. The students gave wonderful presentations on a variety of interesting and timely topics and the question-and-answer session after each speech was very lively, with many questions from the audience.

### What I Learned from My Scholarship Study Abroad at UCLA

**Takaaki Kobayashi**



This was the first time for me to give a speech at a contest.

One of the reasons why I had not wanted to participate in contests was that I was not confident enough in speaking English in front of people because I tend to get stage fright when it comes to giving a speech. However, my teachers praised me on my presentation I gave at another opportunity and they encouraged me to do this. I was so nervous

when my turn came, but I tried my best to stay calm but enthusiastic. Consequently, I won the first prize at the contest, which I did not expect to happen. It is really easy to run away from what you do not want to do, but challenging yourself to do something you are not comfortable doing makes you stronger and you might find new aspects of yourself.

My speech was all about what I learned from my scholarship study abroad experience, such as what happens in classes in Japan and the United States. The most important thing I learned from this trip was that Japanese students, including me, have little knowledge of anything inside and outside of Japan. We could not talk about current and historical issues when we discussed those topics with non-Japanese students. What we have to do is not only to speak English but also learn

about those things through English so we can communicate with people around the world about the world around us.

## Women's Education for a Better World

Samitha Chamanie



This is my first time, participating in a speech contest. It was a great experience for me; preparing for a speech and presenting was a big challenge for me. I appreciated the sensei's help to prepare for the speech. While I was doing the speech I realized that the audience is very important for the speaker. I was sometimes confused because if I couldn't remember the speech it was big trouble for me. I was nervous standing on a stage, and there were teachers and students in front of me. But after finishing the speech I felt an enormous sense of accomplishment. I think this is the same for all of the speakers, because they all did a good job. So I think this was a great step for me, for my school experience and future jobs because it gave me confidence. At the end of the speech, the audience asked some questions to each speaker so it created a clear image of each speech.

My speech title was women's education for a better life. I selected this topic because it is very familiar to me. As a woman studying in a foreign country, this is a big challenge. But it gives me a strong inspiration to continue this life, because if I didn't finish my education it is very hard to make a voice for all of the women worldwide. Although Asian women have to face many cultural, social, and family problems in their rural life, sometimes I have met women who have a very positive story of education because education provides totally different life options from the everyday suffering of lives. So I strongly believe women's education is essential for a better world.

**10<sup>th</sup> Annual All-Meikai University English  
Oratorical Contest**  
December 21, 2017

**Program: Name of Presenters & Titles of Presentations**

1. Nameeta KC (HT, 2<sup>nd</sup> year): *Land of the rising sun*
2. Takaaki Kobayashi (English, 2<sup>nd</sup> year): *What I learned from my scholarship study abroad at UCLA*
3. Reo Takahashi (English, 4<sup>th</sup> year): *My job hunting*
4. Samitha Chamanie (English, 3<sup>rd</sup> year): *Women's education for a better world*
5. Rai Sabina (HT, 2<sup>nd</sup> year): *Technology addiction*
6. Asuka Osato (English, 3<sup>rd</sup> year): *Why do people work?*
7. Hyun Joon Park (English, 2<sup>nd</sup> year): *We have to reduce the number of 24 hour stores*





---

## 英米語学科同窓会 明英の活動報告

---

### 学び続ける同窓会

明英代表 川部 翔

おかげさまで、英米語学科の同窓会組織「明英」は今年で13年目を迎えます。明英では、親睦を深めることはもちろんですが、社会の第一線で活躍されている会員の皆様の学びやスキルアップにつながるような活動も行っています。今読んでくださっている在学生の方は、ぜひ卒業後に英米語学科の同窓会があるということを知っておいていただき、セミナーやパーティーの案内があれば、ぜひ一度参加してみてください。

昨年6月のパーティーでは、会食に先立ち、東山安子先生（元明海大学教授）より『職場の中のノンバーバル・コミュニケーション』というテーマでご講演いただきました。新社会人として活躍されている同窓生も多数参加され、非常に学びの多い時間でした。会食では、毎年恒例となった東京ディズニーリゾートのペアチケットが当たる抽選会も大変盛り上がりました。まだいらっしゃったことがない方は、学びあり、お楽しみありのこのパーティーにぜひお越し下さい。

2月には、同窓生の時澤透氏によるセミナーを実施しました。『親と教員のための子供を伸ばすリーダーシップ』というテーマでした。アクティビティー中心のセミナーで、参加者は熱心にメモを取りつつ、講演者の話に熱い視線を注いでいました。明英では、卒業後も同窓生の学びにつながる事業を積極的に行ってします。興味がある内容であれば、ぜひご参加ください。

12月末には、同窓会本部の郵便物とともに、クリスマスカードをお届けしています。親睦パーティーやセミナーの写真も掲載しました。また、年に一度、現役の教員志望の学生



このような、アットホームな雰囲気で行っております。

との交流会を行っています。卒業生としてできることを、現役の学生の皆さんにもしていきたいと考えておりますが、逆に、学生の皆さんから教えていただくことも多いです。このような現役の学生の皆さんとの交流も数を増やしていきたいと考えています。

明英は以上のような事業を中心に運営しております。今後とも、会員の皆様の心が温まり、学びを得られる同窓会組織を目指してまいります。引き続き、ご支援をよろしく願っています。

---

## 卒業生からの手紙

---

### 英検 1 級、TOEIC スコア 905 の威力を実感した転職体験

2009 年度卒業 山崎 唯香



私は 2009 年に明海大学を卒業し、2017 年の夏までずっと 1 つの会社に勤めていました。最初に就職した会社は、ニット製品の毛糸を売る会社でした。貿易実務から通訳、さらには新卒入社の面接官を経験しました。

当時、思いもつかなかった繊維業界の会社を合同説明会で知り、英語を話す人材が稀であることに気が付きました。その会社では、ちょうど貿易部署を立ち上げたばかりでした。その頃は聞いたことがある会社ばかり面接に行っていて、集団面接を一緒に受けた学生も聞いたことがある大学ばかり。一次面接以上のご縁はありませんでしたが、この会社からはあつと言う間に内定をいただき、8 年ちょっと勤めることになりました。

実際に仕事をしながら貿易実務の基本を身に付けていき、ニューヨーク出張も 2 度行くことができました。

英語を活かせる仕事といえば、観光業が第一に挙げられますが、物流や貿易実務の

仕事なども見てみると選択肢が広がるかもしれません。

そして2017年の夏、まったく異なる環境で挑戦してみたかったので、外資系のオンライン旅行会社へ転職をしました。本社がアメリカにあり、各案件に対する報告や社内メールは英語です。ダイバーシティやハラスメントに関する一般教養のセミナーも充実しています。転職ができたのは、在籍中に英検1級やTOEICで高スコアを取り、資格として転職サイトに登録できたためです。資格がなければこのような機会に恵まれなかったと思います。

在籍時は、ただ長期留学に行きたくて毎日を過ごしていました。毎朝、英単語を覚え、講義の合間に図書館へ行き多読用のGraded Readersを読み、夕方にはアルバイトをして留学資金を貯めていました。そして帰国後、英検1級に合格することができました。

また、明海大学には、TOEICのスコアを上げられる講義、一般教養の面白い講義がたくさんありました。ただ講義を受けるだけではなく、モチベーションを上げてくださる諸先生方と同級生がいたからだと思います。先生方は教育熱心で、困っているときには必ず手を差し伸べてくださいました。また、編入してきた人、社会人になった後に学び直していた人、ラオスやネパール、香港、中国からの勉強熱心な留学生、高校を卒業するまで英語が苦手だったのに英語科に入った人など、個性的な人たちが多く集まっていたように思います。明海大学で知り合って8年経った今でも、会える機会をつくってお互いに励まし合っています。

在籍時は大変なことが多かったと感じていましたが、頑張ったと改めて思います。在籍中の皆さんにも在籍中にできることや困難に挑戦し、後悔のない大学生活を送ってほしいと願っています。



---

## 編集後記

---

「英米ジャーナル」第14号(2017年度号)をお届けします。ご投稿いただきました皆さまに、御礼申し上げます。

今年度から英米語学科では「卒業研究」が必修となり、「英米ジャーナル」のゼミ紹介にも「3年ゼミ 専門領域研究講座」に「4年ゼミ 卒業研究」が加わりました。学生ひとりひとりがそれぞれ興味のある分野を継続的に学び、深く追究した成果が、卒業レポートや卒業論文として実りました。

2017年4月にオープンした「複言語・複文化教育センター(通称MPPEC)」の活動報告からも、ネイティブ教員、留学生、日本人学生が、さまざまなイベントを通じて交流し、英語が得意な学生も不得手な学生も、English Zoneのアットホームな雰囲気の中かで、楽しみながら切磋琢磨しあった様子が伝わってきます。

インターンシップ、海外ボランティア、海外語学研修などでの貴重な経験を伝える学生たちの文章も、読み応えがありました。現地の様子についても、百聞は一見にしかずで、今号は写真も多く掲載しました。これから参加を考えている皆さんの参考になれば嬉しいです。

「英米ジャーナル」に掲載されるような大きなイベントだけでなく、本学科では日々、さまざまな魅力的な学びと人間形成のためのプログラムが展開されています。それらの機会を生かすのは、学生の皆さん次第です。*Hope to see you there!*

2017年度「英米ジャーナル」編集委員会 内藤貴子、中邑啓子

### 英米ジャーナル 第14号

2018年3月発行

明海大学 外国語学部 英米語学科

〒279-8550 千葉県浦安市明海1丁目

明海大学浦安キャンパス

TEL 047-355-5111 (代表)

印刷：佐藤印刷

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-10-2





(2017年度・米国UCLA英語研修の初日)